
【実験 / 都市】

法然太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【実験／都市】

【Nコード】

N0220U

【作者名】

法然太郎

【あらすじ】

その街はあらゆる科学に覆いつくされていた。

ケミカル・ガーデンと呼ばれるその海に浮かんだ巨大な人工都市はいくつもの居住区に隔てられ、そこに選ばれた数千の人達が集い、安らかな生活を送っている。

地上から孤立し多くの人が安心して暮らせる、そんなケミカルガーデンはまさに楽園そのものだった。

しかし、そのケミカル・ガーデンには暗い一面もあった。

超能力者もののお話です。

序章 『奇怪な侵入者』（前書き）

訂正箇所や、感想などお寄せください。 ^ ^

序章 『奇怪な侵入者』

序章 『奇怪な侵入者』

校長室のような立派な部屋の中で、白衣を着た銀縁眼鏡の男が大きな事務机に据えられた革の豪奢な椅子に腰かけている。

その男は目の前のパソコンの画面を先程から瞬き一つせず眺めている。

パソコンのバックライトが銀縁眼鏡の男の顔を克明に映す。彼の顔は機械のように眉一つ動かさず淡々と画面をスクロールさせ、凄まじい速さで上から下へと流れる文字の濁流から情報を読み取っていた。やがて、男は眼鏡を外し、目頭を押さえ、溜息をついて倒れ込むように椅子に凭れた。

男はここ数日、横になって寝ていない。今年になって30を迎える男の体は肉体的にも精神的にも疲弊しきっていた。男の髪は手入れが一度もされていない雑草のような白髪交じりのボサボサ頭で、男の身につけているぶかぶかの白衣はあちこちにほつれや薬品の染みが浮き出ていた。

この浮浪者のようないでたちの彼こそが、21世紀中期の日本の医学・薬学・工学を支えてきたというのは、彼を見て、誰も想像できないだろう。

彼は、つぶった目をゆっくりと開け、目の前の机に備えられている置時計に目をやった。

『3:40』

もう、こんな時間になってしまったか、と彼は椅子から立ちあがっ

て、この部屋の入口のドアにある電灯のスイッチを切った。

少し、仮眠しよう。男は、踵を返して白髪交じりの髪の毛を掻きながらぶかぶかの白衣を脱ごうと――

「今晚は、与塚よづか 一樹かずき」

さっきまでいた自分の真後ろから、男の声がした。その声は老人のようにしわがれていて低く小さな声だった。

与塚 一樹とは言うまでも無くさっきまでこの部屋にいた白衣の男の名前である。

「……き、君は、どこの、誰だ」

与塚 一樹と呼ばれた男は出来るだけ平静を装って、振り向かないまま、背後の声の主に言った。

そのしわがれた声の主はくくく、と喉の奥から奇妙な音を漏らした。「夜遅く、突然の訪問に驚かれていますでしょう心中お察します」

「……………」

――沈黙。

与塚はこの声の主に対し、何も言う事が出来なかった。というのも、与塚は今自分が置かれている状況を誰よりも危機だという事を把握しているからである。今、自分がいるこの部屋には誰にも入ることが許されていない。隣接する部屋も無く、このフロアは与塚のプライベートな所だった。時間は深夜だが、警備は厳重に厳重を重ねている為、侵入者はこの部屋はおろかこの自分がいる建物にさえ近づく事は不可能だろう。

しかし、こうして自分の後ろにいるはずのない侵入者が背後に立っている。与塚一樹はそんな状況に恐怖していた。

背後の男が何も言いださない。与塚はもう一度彼に誰かと問おうと

した所――

「誰か、と問われれば返答しかねます。しかし、『何か』という事ならお答え致しますよう。私は『魔法』。個体名称はケルノウ、と申します」

この男は何を言っているのだろうか。与塚の思考は混乱してきた。それより――と、自らをケルノウと名乗る男は続けて言った。
「私はあなたのしている事に非常に興味がありましてね。ぜひともあなたの研究を私に譲って頂きたいのですが」

ケルノウのしわがれた声は喜びに弾んでいた。

与塚は驚いた様子振り返り、ケルノウに聞いた。

「私の研究を知っているのか！」

声を張り上げ与塚は振り返った。すると与塚はひいつ、と恐怖の声を上げて自分の背後にいた男から身を引いた。

与塚が先程まで話していたケルノウの顔はこの世のものとは思えなかった。

20代くらいの若い男性の顔に老人のような皺が幾つも刻まれ、そして窪んだ眼窩の奥にある妖しく輝きを持つ瞳は肉食獣のようなグリーンの眼。

そして髪は左右非対称に伸びた肩までの青い髪。真つ黒なスーツに身を包んだ化け物がいた。

化け物はにっこりと微笑んでいた。

「ええ、あなたの超能力開発についてです、それと私が今から3日後に殺めるあなたが作ったこの都市に住まう何万人の罪なき命と交換しましょう。私はその間、この街に滞在させてもらいますので、呼んでいただければいつでもご返事を聞きにまいります」

では、とケルノウは踵を返し帰っていった。

つい先程までは『長い通路だった所』を、今では瓦礫で床が見えなくなつて粉塵が立ち込めている所をケルノウは音も無く静かに歩いていた。通路が無残な姿になつているのもおそらくあの男がやったものだろう。

——これは明らかな脅しだ。

そして、与塚一樹が作った人類史上最大規模にして、唯一の人体実験施設——

通称、『実験都市』に未だかつてない危機が襲っていた。

序章 『奇怪な侵入者』（後書き）

こんな感じでとりあえず始まります。
どうぞお付き合いくだしあ

第1話 『合格・・・？』

第1話 『合格・・・？』

7月下旬――

「受付番号17番の 字原 彰さまー」

間延びした声で僕の事を呼ぶ女の声が聞こえてきた。

僕がいるのはとある会社のエントランスホール。そしてこのただっ広い空間に女の声が反響する。ホールを歩いている会社員風の人たちが一斉にいぶかしむ。

僕の名字を間違えて呼ばれるのは小さなころから抵抗があつた。

僕の名字を見た人はこの18年間の間で誰一人正しい読み方で呼んでくれなかった。

まあ、大抵の（いや普通の）人なら僕の名字を『じはら』と読むだろう。

しかし、そう呼ばれると非常に恥ずかしい。

僕は未だにじはら、じはらと呼び続ける受付の女の方まで駆け寄った。

「字原です。 字原 彰」

すると、受付の女の方は僕の方を見てハツとした顔をした。

「ああ、大変申し訳ありません。 字原さま」

と、小さく整ったお辞儀をした。この人に僕は受付に来た時に名前をきちんと言ったのに・・・

僕がムスツとした顔をみせると、受付の人はにっこりと営業スマイルを浮かべて僕の方を見た。

これもマニュアルどおりなのだろうか・・・？

「本日は、ケミカルガーデンC・G本社に来ていただき誠にありがとうございます。」
女は教科書を朗読するようにぺらぺらと話し出した。

「今日お呼びしたのは、字原さまが我がケミカルガーデンC・G社の厳密な検査の結果。晴れてケミカルガーデンの居住権を手にしたという事です」

はい・・・？・・・合格？

突然の報告に半ば啞然としていた。

「ほ、本当ですか！？」

慌てる僕とは正反対に受付の女は落ちつき払った営業スマイルのまま、にっこりとしていた。

「はい。おめでとございます」

極めて簡素に女は言った。女は続けて、

「今、あなた様の居住パスを発行しております。つきましては当社の3階にてケミカルガーデン居住にあたつての諸説明があります」

間もなく係の者がご案内しますのでロビーでお待ち下さい。受付の女の人はずいぶんだったが僕の耳には届かずに、この叫びまわりたい興奮を抑え込むのに必死で、よろよろとあさつての方へ歩いていく。

（この時を待っていた——！！）

恐らくこれは僕の人生で最良の瞬間じゃないのか？

僕の18年の人生は一言でいえば失敗続きの人生だった。告白すれ

ばフラれ、テストに挑めば無様に玉砕し、受験は僕だけが落ち、それも、タイミングが悪かったり、勉強範囲を間違っていたり、受験会場までの電車を間違えたり、どれをとっても僕の人生は失敗の上塗りをしていくような日々だったとおもっ。

しかし、今日、駄目もとで申請したのが合格という結果となって、やっと神様は僕にも『成功』という輝ける二文字をここに体現してくれたのだ。

喜びに思わず泣きそうになる。

やばい、マジで嬉しい……

するとうずくまった僕の肩に聖母のようなやわらかな感触の手がポンと添えるようにゆっくりと置かれた。

ああ、聖母さま――。

僕はその手が生える袖口をなぞるようにゆっくり聖母の顔を見上げた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

見上げた先には、僕を奇異の目で恐る恐る伺うスーツ姿の聖母がいた。

第2話 『自己紹介』

第2話 『自己紹介』

『ケミカルガーデン【Chemical Garden】。』

それは21世紀中期に海上に作られた3000平方メートルを超える巨大な人工都市のモデルケースの名称です。』

ケミカルガーデン
C・G本社3階

映画館のような広い所で大勢の人と共に、ケミカルガーデンについての説明の映像を字原^{あざはら} 彰^{あきら}はうんざりした様に眺めていた。C・G^{ケミカルガーデン}の事はここに来る前に随分調べてきた。今更解りきっているのが合格結果に安堵している字原は重い瞼と一進一退の戦いを繰り広げつつ、映像を眺めていた。映像とともに説明のアナウンスが依然続いている。

『C・Gは研究員含め人口1万人の都市であり、この都市は医学や薬学などの最先端の技術が集結しており、1日1回、皆さまに当社の定期健診を受けて頂く事で、安心して生活を送る事が出来ます。尚、皆さまには常に世界各国の最先端の医療が受けられる事を保障します。』

また、更なる安全のために都市全体を覆うドーム状の幅5メートルの強化プレキシガラスや最新の人工島技術により、これまでの海上施設にみられた災害は一切・・・』

説明は続いている。その頃には字原の意識はとうに消えうせていた。説明は施設安全面の説明を終えて、次の話題に入っていた。

『C・Gの居住権を持つ皆さまには生活を送るための住居と一定量の食事が当社より与えられます。これから言うわが社の3つの社規を守って頂かなければいけません。』

一つに、ケミカルガーデン内から当社の許可なく出る事。

二つ、ケミカルガーデン内での仕事の従事

最後に三つ、居住権を持たない者の入所ほう助。

これら三つの何れかを犯した場合にはケミカルガーデン居住パスを剥奪されるのでご留意くださるようお願い申し上げます』

不意に映像が切れ、館内の照明が一斉に点いた。

「うあ……?」

気の抜けた大あくびと共に字原は天井からの眩しい光で眼を醒ました。

『説明は以上となります。それではケミカルガーデン行きのバスが既に待機しております。皆さま、そちらまでのご同行をお願いします』

アナウンスが告げると、皆、椅子から立ち上がり、さっき入ってきたドアに戻っていった。

会場にいた人たちが次々と出てゆく中、字原が未だに目がさめきらないのか呑気に伸びをしていた。そして、字原のほかにもう一人、椅子で腕組をして座っている男がいた。

（説明が終わったか……ンにしても、よおこんなキレイことば

つかべらべら並べられるもんやな・・・)

青いワイシャツに革のベスト、ファッション用の細いネクタイに迷
彩柄のカーゴパンツにもじやもじやの天然パーマの青年——澤上
信次が椅子から起き上がって、辺りを見渡した。

あ、いかん。皆行ってもうたか・・・

出遅れた事に気付いて澤上は椅子の下に置いていた肩かけのエナメルバックを持ってドアに行こうとした。先に行った人達は、ドアの
出た所で待機しており、澤上に迷惑そうな眼を投げかけていた。
慌てて、ドアへ行こうとした澤上だが、妙なものが端にちらついた。

眠そうに目をこしこしとやっている赤い半そでのポロシャツにジーンズとい
ったごく普通のいでたちで歳は澤上よりすこし下くらいの
青年——字原彰がそこにいた。

「おいっ!!」

何者かに袖をぎゅっと掴まれた。

寝起きの悪い僕にとって、その奇襲は僕の気分を害するには十分
すぎた。

「なっ、なんですか!!?」

目の前には目つきの悪い不良のような天然パーマが僕を呆れた様子
で見ている。

その不良は僕を諭すように言った。

「あのな、何ですかとちゃうわ。みんな外で待つとるんやぞ。ほれ、はよお行くぞおー！」

「い、痛いってー！！腕を引つ張るなよ——！！」

ずりずり、天然パーマの不良が細身の見かけによらず僕の腕をちぎれんばかりの怪力でに引つ張っている。やがてケミカルガーデン居住区行きバスの前に辿り着くと、先程から僕が騒ぐのを見かねて握っていた手を離してくれた。

バスはほとんど人で一杯で、一番奥の5人がけのシートがぽっかりと開いていた。

とりあえず、僕達2人はそのシートの端と端に腰かけた。バスは僕たちが乗ると直ちに動き出した。ふと僕が先程まで引つ張られていた腕を見た。

あ、アザが出来てる・・・

ひりひりする腕とその腕を引つ張った犯人を僕は反抗の目で睨み続けた。

その様子の僕を見て、彼はばつが悪そうな顔をして僕にすまん、と謝ってくれた。

なんだ。話の解る不良じゃないか。

「俺もちよつと焦ってたからな。や、あんたには悪いことした」

（ 関西弁？ ）

聴きなれない言葉に戸惑っている僕に話の解る不良はこれから同じ街に住む仲間やし、と僕の名前を聞いてきた。

「あむねい 字原 あむい 彰」

僕が名前を言うと、彼はびしつと素早く手を出して漫才の突っ込みのような動きをした。

「フルネームかい！ま、ええわ。俺は澤上 さわかみ 健吾 けんごや、今日からよろしゅうな」

「……べつに、よろしくされる理由なんてないじゃん」

フルネームを言った事に突っ込まれて、少し恥ずかしくなりながら僕はようやくこれだけ言った。

「おうおう。随分な言葉遣いですねえ。俺、多分お前より年上やぞ？」

「あんた、いくつよ」

「21歳や。よぉ覚えとけっ！」

「僕は18。……たいして変わらないじゃんか」

「ああ、そりゃ〜ごもつともでっ！！あははははっ！！！」

澤上という関西人は一人げらげらとこの静かなバスの中で笑いつづけている。

何がそれほどおかしいのだろうか……僕はバスの外で流れる景色ずつと眺めていた。やがて、景色に海の澄んだ青色が混じって見えてきた。太陽の光を受け、蒼い海は僕達を歓迎するように美しく光り輝いていた。

すると、澤上が僕の方へおもむろに僕の方へ近寄ってきてバスのフロントガラスの方を指差した。

「よお字原。見えて来たぞ。あれが……」

「ケミカルガーデン……」

円形の巨大なガラス壁に覆われた海に浮かぶ巨大な人工都市、人が作り出した箱庭。

ケミカルガーデンがそこにあつた。

僕の顔は喜びに随分緩んでいた。しかし、隣の澤上の表情はさつきまでの彼とは違ってかわって真剣そのもので刺すような鋭い眼でケミカルガーデンを睨みつけていた。

「なあ字原、あの都市の別名って知ってるか？」

澤上はその街を見据えたまま言った。

「別名？」

モルモット

「人間が実験動物とされる狂気の実験施設——『実験都市』」

初めて聞く。僕の疑惑の目に気付いたのか、澤上は

「ま、噂やけどな」

澤上は僕の方を見て、言った。

第3話 『とあるメイドと露出狂』

第3話 とあるメイドと露出狂

僕がこのケミカルガーデンという街に来たのにはたいした理由はなかった。大学受験にことごとく敗れた末に、僕はケミカルガーデンに行こうと中学のころから兼ねてから決めていた事だった。この都市には仕事と生活が誰でも隔てなく与えられる平等な世界。

そんな素晴らしい夢の国に憧れを抱いていた。失敗続きの僕にもようやく運がめぐってきたと思ったが、やはり現実は現実でしかない。ケミカルガーデンに入れるのはほんの一握りの人しかなかった。ましてや、失敗続きの僕なんかが・・・

と、思っていたら僕は今、ケミカルガーデン内『第6号居住区』という所にあるマンションの一室にいる。人生とはわからないものだ・・・。

（たしか、バスの人が自分の部屋で待ってるようにって言ってたなあ・・・）

僕は辺りを見渡して驚いた。1Kのフローリング張りの広い洋間にはテーブルやベット、暖房器具、更にはパソコンまで、新品の家具達が既に用意されていた。まるでさっきまで人が住んでいたような生活するのには困らないだけの品々が見て取れた。

「トイレもお風呂もちゃんとついてる・・・」

僕はこの準備万端さに恐怖すら感じていた。これは良い事なのに、自分でもどうして怖いかわからない。不思議な感情だった。

(ひゃくつ!!水!!つめて!!)

変な叫び声が隣からシャワーの勢いある水音と共に聴こえてくる。隣の部屋の風呂場からのようだ。

「・・・忘れてた」

このマンションで僕、あさはら　あきら字原彰は404号室。そして変な不良自称21歳の関西人、さわかみ　しんじ澤上信次は、403号室。ヤツとは隣同士になるという最悪な結果になってしまったのだ。

（この街に来て、失敗する事があるんだ。あはは。．．．）

泣くのは今日2度目だ。

『ピンポーン』

頭を抱えて得体の知れないラップ音に苦しんでいる僕の部屋に來客が着た事を告げる呼び鈴が鳴った。ラップ音と共に奇声が隣から聞こえてくるあたり澤上ではなさそうだ。

(じゃ、誰だろう・・・?)

会社の人かな？と、僕は扉を開けた。

[illegible]

突然の出来事なので何と形容すべきか。ハッキリ言おう。僕の目の

前には実年齢14歳位女の子が立っている。それも飛びきり可愛い女の子だ。僕を上目遣いで見上げてくる彼女の目はぱっちり大きく、ほのかに紅い唇はにこー、と優しい笑みを浮かべていた。珍しい緑色のおかつば頭が特徴的だ。・・・もう、だめだ。言ってしまう。

「なっ・・・！！なんで僕の目の前にメイドさんがあああああああ
ああ——！！！？？」

僕は喉が壊れるんじゃないかというくらいの大音声で正直な感想を目の前にいるメイド服を着た女の子にぶちまけた。

すると、（厄介な事に）その騒ぎを聞きつけた澤上がバンツ！！というドアの開かれた音と共に隣の部屋から文字道理飛び出て来た。それもびしょぬれの裸体に腰に申し訳程度にまかれたタオルといった変態スタイルで、だ。

「どうしたあ！？」

・・・いや、お前の方がどうしたって言いたいよ。

僕の目の前にいたおかつばのメイドさんは出てきた澤上を怯えた様子で見た。そりゃ誰だって驚くだろう。腰タオル一丁という半裸の澤上はこちらへずいずいと『足』を動かして近寄ってきた。

あ、止める。それ以上足を開くと——

はらり。

なんだろう、半裸の澤上の方からとても嫌な音と共に布形の物が落ちて代わりに別の『モノ』が——

「いやあああああああああああああ！！！！！！！！」

メイドさんはこの世のものとは思えない物を見てしまったような叫び声いや、悲鳴をあげながら、どだだだだ、と屋内で出るはずのない土煙を上げて僕の部屋の中へと一目散に逃げ出してしまった。

「・・・どしたん？」

澤上は落ちたタオルを拾いながら何事も無かったように言った。

人さまの前で全裸になつて、まだそれを言うか、澤上。

「とりあえず、服きろ。露出狂」

ばたん。僕は露出^{さわかみ}狂を背に扉を勢いよく閉めた。

（はぁー。）

閉めた扉に凭れて長い溜息をついた。様々な事が立て続けに起こって混乱気味だ。一旦落ちつこう。ひとまず僕はキッチンに行つて、お茶を沸かそうとしたがあいにく、コップやヤカン等はあつたが茶葉の類はなかった。同じく置いてあつた冷蔵庫の中も空だった。

とりあえず、水でもと思い、僕は僕を含めて2人分のコップ（食器類は整つていた）を汲んでリビングまで持つて行った。

さっきのメイド服の彼女は今は童話の少女のようにしおらしくちょこんとフローリングの床に座り込んでいた。彼女がひらひらの長いスカートのひざ元を掴んでプルプルと震える様は犬の赤ちゃんのようでもとても可愛かった。

「どうぞ、今はこんなもんしかないけど」

僕は彼女の目の前に水の入ったコップを差し出す。彼女は初めは抵抗していたもののやがて、小さく「いただきます・・・」といった後ぐびぐびと水を飲み始めた。

そうして、数分の後、やっと落ち着いたのか彼女が口を開いた。

「うっ……ごめんなさい勝手に入っちゃったりしてしまつて……」
「本当にすまなさそうに謝る彼女の態度に逆にこっちが申し訳なくなつてしまう。」

「それはいいつて。あんな露出狂見たら普通誰だつて逃げ出すよ」
僕は言つて後悔した。

落ち着きを取り戻しつつあつた彼女の顔に陰りがみえてきたからだ。
（やなこと思い出させちゃつたな……）

（ここは話題を変えないと……）
僕は出来るだけ間を開けず言つた。

「君、ここには何の用事で来たの？」

……う、相手によつて口調変わりすぎだろ自分。しかし、なんとなくそんなオーラが彼女にはあつたのだ。

「あつ、わ、わたしは、貴方の健康チェックを、つとめ、させて、いただく、ものです」

頬を染めて、頑張りながら言葉を紡いでいる彼女はめっちゃやテンパッている様子だが、何とか聞き取れた。
え……？ 健康診断つて？

目の前のメイドさんは僕の頭が疑問符だらけの僕の反応を汲んでくれたようだ。

「えつと、この都市では3日に一回、居住区にあるおっきな病院で定期健診を行います」

メイドさんの口調が途端に流暢になった。だいぶ言い慣れているら

しい。それに、何故か話している彼女の姿は得意げだ。

「尚、定期健診に行く際に何らかの感染症にかかっている場合がありますので、わたしが毎日チェックすることでそれを防ぐ役目でもあります」

へえ……僕は思わずうなずいてしまった。まあ、当然と言えば当然の様な気もするが、ただ、ちょっとおおげさじゃないかと思う。いや、かなり。

あれ……？まてよ？

「ねえ。君さつき貴方の健康をどうたらって言ってたけど、僕みたいな一人一人に、君みたいなのがいるの？」

メイドさんはきょとした顔をして、直ぐに笑顔に戻して、

「はいっ」

と、当然のように言った。

驚いた。じゃあこのケミカルガーデンの人口の半数くらいがメイドさんになるんじゃないか。本当に一握りしか住む事が出来ないのか。

僕は改めて自分がどういう場所にいるのか認識した。

「あとですね？」

メイドさんがますます得意げに話した。

……あれあれ、メイドさん。さつき来た時と随分口調変わってますん？

「当然のこと、わたし達メイドは自分の担当のひとの日々の健康状態をチェックしなければなりません。当然。日々の食事や住居の衛生面、就寝時間、歯のブラッシングの仕方に至るまでチェックします。もちろん、出来る限り勤務状況の配慮、まあ、お手伝いですね。するつもりです。わかりました？」

説明し出した彼女はまさに立て板に水、超マシンガントーク。もう、とにかく言われ放題だ。しかも最後の方は彼女、フィギュアスケー

トの演技のように腰をいっぱいっぱい逸らして指まで突き立てたじゃないか。

「……とにかく、君は僕の監視役という訳だ」

「そうですっ」

即答かつ！心の中で澤上流ツツコミを入れる。

「だからわたしが——！！」

「あ、わかったから。一旦落ち着いて」

「え？ あっ……つつ、つい、こうふんして、ごめん、な、さい」

途端、彼女はずっと放置した朝顔のようにしょぼんと身を縮めてしまった。

黙りこんだ彼女。気まずい雰囲気……。

ふと、彼女のコップを見ると水が無くなっているのに気づいた。

「水、いれてくるよ」

僕が立ちあがろうとした時、

「あ、いい、です。今日は帰りますわたし。明日にはチェックに来ますのでこれもよんどいてください」

そして、彼女はそそくさと、何かの本を僕の前に置いてドアに向かった。

「待つて」

僕は彼女を呼び止めた。彼女はくりつと首だけこちらをみて返事した。

「自己紹介。してなかった」

「あ………」

「僕の名前は字原 彰。君は？」

目の前の少女は僕の方をじっと見つめていた。どれだけの時間が経っただろう。少女は嬉しそうに口を開いた。

「音緒^{ねお}。わたしの名前です」

「そっか。まあこれから世話掛けと思うけど。よろしく、音緒」
「よろしく・・・彰さん」

その時の音緒の顔は初めて会った時のように優しい天使の微笑みだった。

第4話 『零下の魔女 エーラ』

「第4話」 零下の魔女 エーラ

第3居住区アーケード。

(・・・ずいぶん、平和なところね・・・)

ほんの30分前に、ケミカルガーデン内に入ったばかりの少女は、街々の雰囲気を見てつくづくそう感じていた。
賑やかな街のアーケードを歩く少女の姿をすれ違いざまの人々がじろじろと嫌な目線をおくってくる。

(う・・・)

それはそうだろうと彼女自身も感じていた。今、熱帯気候のこの地域は夏特有のじめじめした暑さと聞いていたので露出度の高い服をわざわざ買ってきた。自慢の赤くて長い髪の毛もこの時の為にはさしショートに切ってきたのだ。

しかし、それは過ちだった事にこの街に入って10分もしないうちに気付いた。珍しい髪の毛や水着のような変わった服や外人のようなグリーンの眼の彼女の異常さはどんどんこの街で囁かれてゆくばかりだ。

でも、そんな事は大事な問題ではない事もわかっていた。

彼女が来た目的はこの街に巣食う『敵』を始末する事のみ。
エーラ、という赤髪の少女は己が使命を全うする事のみを考えていた。

/

第六居住区、404号室

「ふーん・・・なるほどね」

僕、字原彰すけはらあきらは先程から自分の部屋のパソコンを見ていた。というのも、さっき僕の部屋に来たメイド服の少女——大石音緒おおいしねおが渡した本の中には、部屋のパソコンに自分の住む第6居住区の事や、12まである居住区全体、加えてこの街全体に関する情報があるとの事だった。早速、僕は10分ほど前からパソコンを見てこの街の事を少しづつ学んでいった。

どうやら、この街にいる間は皆、働かなくてはいけない。ただ飯に住居まで与えられているのだから当然と言えば当然だ。そもそも、ここは社会生活に適応していくための施設でもあるんだから。とはいえ、皆がずっとこの街に留まるわけにはいかない。皆、2年から5年の間にこの街から出ていく。出て行った後の就職は比較的優待されて万々歳だ。

僕の仕事の内容はこのパソコンを通じて送られてくるとの事だ。その仕事の内容は居住区内にあるスーパーやファミレス内での仕事やマンションの清掃、居住区内の入院患者の相手までと多岐にわたっている。

「清掃ボランティア 14時まで 場所 第3居住区1番地」

数分前に発信音と共に、パソコンにこの文面が書かれたメールが僕に送られてきた。

誰からだろうと、アドレスをよく見てみると『neo』とあり、どうやらあのメイド、音緒から送られてきたものだった。

要件のみを出来るだけ絞ったような無表情なメールを受け取った僕は早速、メールにしたがって部屋をでた。

ふと、部屋を出た時なにやら澤上の方が騒がしかった。ぎゃーぎゃー澤上がまくしたてている声がマンションの廊下一帯に響きわたっている。そんな澤上を案じる思考を0・01秒で取りやめた僕は所定の場所に行くことにした。

/

第3居住区 自然公園「シルベア」内

「え？なんですって？」

男が目の前赤髪の少女にもう一度言う。
赤髪の少女は、さも当然のように言った。

「だからさ、そのアイスクリームのアイスだけくれないかって。コリンはいらないから」

やっぱりか。アイスクリーム売りの男はほんと、この奇妙な客に先程から困っていた。見れば、居住区パスを持っていないし、とかいって特別怪しい風にも見えないし、アイスくらいはおごつてあげようと、ただでさえ親切丸出しのこの優しいアイスクリーム売りが、更に注文をつけられるとは思っていなかった。

ねー、ねー、と少女は責め立ててくる。見た目は高校生くらいの女の子だが、奇抜な水着の様な服、更にパンクロッカーの様な赤髪のおかしな姿の女の子はそれだけでも目立ちすぎるのに、騒ぎ立てるものだから、公園内での人々の視線が否応なくこの小さなアイスクリーム屋に注がれている。営業妨害もいいとこだ、と男は思った。

「・・・コリンも食べたらいんじゃない。うちのはおいしいよ？」

コーン付きのアイスを差し出している男の顔は苦渋の笑顔だった。そんな精いつぱいの彼に少女はふるふると首をふった。

「コーンはきらい。口がばさばさするのがイヤ」

互いに一步も引かない。

じゃあ、どうやってアイスを渡せばいいのか・・・？

男はこの繰り返しされるであろうやり取りを早く終わらせようと必死だった。

「あゝ」

少女のすぐ後ろから別の声がした。群衆の一人だろうか、赤いポロシャツにピンクのケミカルガーデンボランティア員のエプロンを付けた高校生くらいの男の子だ。

すると、その少年は少女と何やら話していた。少し話した後、改めて少年が話しかけてきた。

「僕、ここのアイス、この子に買いたいんですけど」

買いたい、というのは『この街』では妙な物言いだ。この街では居住区パスの提示であらゆる買い物ケミカルガーデン本社から提供という形で無償で貰う事が出来る。事実、この街には通貨は存在しない。数千人もの生活を一企業が請け負うというのも妙な話だと、この街に住み始めた時、そう痛感したものだ。アイス売りの男は少年にその事を伝えると、少年は、首にかけていた居住区パスを取り出した。

「はい、どうぞ」

アイス売りの男は安堵のため息をつきながらようやく少女（ついでに危機を救ってくれた少年も）にアイスを渡した。そして、少年はアイスを少女に渡してそのまま公園の奥に行ってしまった。男が見

渡すと、こちらを見ていた人々が堰^{せき}が切れたように、一斉に注文をぶつけてきていた。

ああ、今日もまた忙しくなりそうだ。

/

（これってそういう意味あったんだ・・・）

くると、僕、字原^{あやはら} 彰は居住区パスをまじまじと眺めた。僕はさっきまで、自らに数時間前に言い充^あてられたこの公園内の清掃ボランティアをしていた所だったのである。

「ねえ」

ありがとう、の言葉も無く、さっきから女の子は執拗に僕に付きまといてきていた。

「これ、いらないうてば」

女の子はアイスのコーンをぐいぐいと僕に押しつけてくる。

僕は彼女を無視して、公園にある大きな噴水の前のベンチに腰掛けた。清掃ボランティアの最中だが、ここ一帯には誰もいないので、誰が見てるわけでもないだろう。僕はもらったアイスを食べ始めた。すると、女の子はベンチに座った僕の隣に腰かけた。

勢いよく水が噴き上げる噴水は、青々と一面に木々が生い茂るこの公園の中の景観を二倍三倍にも引き上げていた。噴水が飛ばす水しぶきと、風通しのよいこの公園内の涼しさは思わず今が夏だという事も忘れてしまいそうだ。

（その中で食べるアイスはまた格別だな・・・）

僕は、隣に座った女の子の方をちらつと見た。女の子はアイスを持

ったまま、食べようとしない。妙な事に僕が食べ終わったにも関わらず、女の子の持ったアイスは全く溶けていなかった。

「食べても、いいんだぞ。それ」

「………なんでこんなことすんのよ」

女の子の声は怒っているようだった。

「………なに怒ってるんだこいつ。」

「さっきからあの店員に欲しい欲しいって人目もはばからずにいつたのは誰だよ」

「でも、私があんたに買ってほしいって言ってない!!」

「お礼なんていいからもらうときだよ」

「………!!」

ベンチから立ち上がると、女の子は、「待ってて」と言つて、噴水の方まで駆けだした。水遊びでもするつもりか………?

「ねえー!!好きな動物何ー?」

噴水の前にいった女の子は振り向いて僕の方を見て聞いてくる。

「猫ー」

僕が言うと同時に彼女は噴水の前へと細い両腕を差し出した。

すると、彼女の眼の前で信じられない事が一瞬にして起きた。

噴き上げていた噴水の水が突如、突き出した彼女の両腕に渦を描いて集まってゆき、やがて噴水の水が集まって大きくなった渦はたちまち、宇宙空間の中で重力を失った液体のような大きな水の塊となつて彼女の目の前にふわふわと浮いていた。

「あ、あ………」

言葉を失う僕を余所に彼女は指をくねくねとイソギンチャクのように

動かした。

すると、水の塊がぐにやぐにやと蠢いた。少しして、水の塊がパキパキと音をたて一瞬にして凍りついた。出来たその人間大もある大きな氷像はある形をとっていた。

「ね、猫だ・・・!!」

「どう？これがお礼」

言葉を失い、啞然とする僕の目の前、氷像の傍の女の子はにかつと笑った。おもちゃを自慢する子供のように曇りのない彼女のその笑顔はとても可愛かった。

/

「・・・!!」

昨日、真夜中にケミカルガーデン内の管理者である与塚一樹を訪ねたスーツ姿の化け物、ケルノウが突如訪れた戦慄に身体を震わせた。（ようやく、ですか。待ちくたびれましたよ・・・）

ケルノウはくくく、と老人の様なしわがれた声で嗤った。ケルノウがいるのはケミカルガーデン上空、虹色に輝く立方体の中にただ一人、その中で浮かんでいた。この浮遊する物体は魔法によるものだった。

ケルノウは先程の戦慄の訳を瞬時に悟っていた。

魔法は人を脅かしてはならない存在であるのにかかわらず、魔法を脅迫の材料に使ったケルノウに制裁を加えるべく彼方から刺客が差し伸べられている――。

ケルノウは付近の何者かが魔法を使ったのをたった今感じ取ってい

た。

（この魔法を使った反応・・・長い間、感じていませんでしたね）

ケルノウは眼下のケミカルガーデンを見つめ、満足げに微笑んだ。
その緑の眼は獲物を狙う獣そのものだった。

「零^{れいか}下の魔女エーラ。貴方は今夜、この街で朽ちるのです」

第5話 『魔法使いの使命』

「第5話」 魔法使いの使命

「魔法使い!？」

僕は隣に座っている、つい先程猫の氷像を作った女の子に驚いて尋ねた。

「うん。まあ平たく言えばね」

と、女の子は手の上にのせたアイス进行をぺろぺろと舐めながらあつさりと言った。

魔法なんて映画の中の世界だとはんの5分前まで考えていたのに、それほどまで衝撃的な出来事を目の前にして僕はあれから暫く言葉が出なかった。茫然としながら見つめていて、彼女は僕をチラと見た後、素早くそっぽをむいた。どうした、と言おうとしたら、

「・・・アイス、ありがとう」

「え？」

「このアイス。あなたがいないともえなかったと思うし・・・」
やっぱり、感謝されてたのか。僕はほっとした。

「別にいいよ、それくらい。それより僕はあの猫の像を作ってくれた事を感謝したいくらいだよ」

「お、お礼になってよかったわ」

そう気丈に言う彼女の顔は嬉しそうだった。

「それにしても、君はここに住んでないんだよね」

「エーラって呼んで」

エーラ?変わった名前だな。やっぱり外国人か・・・姿だけでそう見える。

「・・・エーラ、はどこに住んでるの？」

そういうと、エーラは考え込むようなしぐさを見せた後、

「どっこも。私は旅をしてるの」

「旅？」

僕が聞くと、エーラはそう、と言った。

「終わりのない旅。ずっとずっと前からしてただけだね。なんだかそれもマンネリに思ってた。だから私はこうやって今日みたいに遊んでるの」

エーラの言ってる事は所々がわからない。けど、自分の気持ちを吐露する様に言葉を紡ぐ彼女に僕はへえ、と返事をしてあげる事しかできなかった。彼女は続けた。

「生まれ変わりってあるでしょ？あんな感じで私みたいな魔法使いは自分の肉体が精神に限界を悟ると、後先生まれる人間に『使命』と『魔法』を植え付けて生まれ変わることです。新しい魔法使いになるの。だから私はずっと『使命』を背負ってる。それで今までずっと生きてきたの」

「……………？　よりわからなくなった。使命がどうたら魔法がどうたら。不思議ワードの連続だ。まるで漫画だな。しかし、エーラの言ってる事は決して嘘とは思えない。なぜならつい先ほどエーラの『魔法』をこの目で見てしまったからだ。真実を裏付ける決定的な証拠は十分に見せつけられた。」

「使命って何？」

僕は何気なく聞いた。こんなすごい力をもつてしてもなお、魔法使いが縛られる存在になんとか興味があった。すると、エーラはめんどくさそうに

「わるもの退治」

持っていたアイスをむしゃりとかじりながら言った。アイスを食べ終えたエーラはベンチから立ちあがった。

「じゃ、たぶんもう会えないかもしれないけど私もう行くね。アイヌ、ありがと」

そういつて、エーラはとことこと歩きだした。やがて振り向いて、

「その猫ねー、私がこの街にいる限りはずっと溶けないからーじゃねー」

と、エーラは去っていった。僕は去ってゆく魔法使いの背中をじっと眺めていた。途端、後ろから――

「なーにお掃除サボってるんですかあ？」

「うわああああああああああああ！！！！！」

僕は心臓が止まるんじゃないかと言っくらい驚いた。後ろには前と同じようにメイド服に身を包んだ中学生くらいの緑のおかつぱの女の子、音緒ねおがいた。

「な、なんでここに・・・？」

音緒は頬を染めて、

「り、理由なくきてもいいでしょう！？あつ、そうだ。ちゃんと仕事してるかのチェックですよ！！」

……『あつ、そうだ』って…本音らしき言葉を開口一番吐いておきながらごまかせると…へ？理由なく？もしかして……」

音緒を見ると、もじもじとしおらしくしている。まるで、初めて音

緒が来たときのようだ。

音緒はどきまぎしながら

「そのですね、一緒にお掃除しましょうっ！暇なんです。わたし」
駄目・・・ですか？とうるうるの瞳で見つめてくる。『色んな意味』
で非常に困る。

「・・・いいよ。サボってた僕が悪かったよ。一緒に掃除しよう」

言っと、音緒は待ってましたと言わんばかりに――

「はいっ！！」

音緒が勢いよく伸ばした手には何処からとったのか、きっちりとホ
ウキとちりとりが2人分握られていた。

この街に来て奇妙な関西人に魔法使いに氷の猫にメイドに・・・お
かしなことには事欠かないこの街に来たのも僕の失敗だったのか・
・・・？

/

同時刻、ケミカルガーデン第6居住区403号室。

「なんや・・・あんたの役割の説明は終わったんやろ」

さわかみしんじ
澤上信次は、鬱陶しそうに扉を開け、目の前のメイド服の女にいつた。そのメイド服は淡々と言った。

「いまは既に貴方の勤務時間です。与えられた仕事はこなして頂くのがこの街のルールです。皆さん、既にお仕事に就かれていますよ」

澤上はめんどくさそうに、メイドの顔も見ようとせずに部屋に戻りながらぶつくさと言った。

「あー、そりゃ悪かったなあ。病欠ってことにしといてくれ」

「……………」

メイドは表情を曇らせた。

澤上の後ろにいるメイドは服は一緒だが字原に付いたメイドとは姿かたちが全く違っていた。字原の方が少女と言うならこちらはどちらかと言うと澤上と年齢が一緒くらいの20過ぎのお姉さんと言う感じた。言葉遣いや、冷静さからそれを伺えるだろう。

このメイドは先程自分の名前を名乗った。だが、澤上はああ、そうとだけ言ったきりだ。メイドは何故自分がこの人に嫌われているか理解できなかった。嫌な事をした覚えもない数時間前に自己紹介したばかりだ。思えば自己紹介をした時から嫌われている。

「澤上様……」

メイドは自分が泣きそうになるのを必死に堪えていた。

「なんや。まだ用かい」

澤上の口調は突き放すような冷酷な声だった。

涙が目に溢れてきた。もう、喋ると涙声になる。でも聞いておきたかった。

「どうして…どうして。私に、冷たくするんですか………！」
澤上は黙っていた。

「私の、何がいけなかったんでしょうか？ 私にはわかりません！
！ あなたが何故そこまで私の事が嫌いなのか………！！」
涙でぐしゃぐしゃになった声は上ずっていた。

「お願いです…教えて……」

メイドの眼の前の澤上が滲んで澤上の表情が見えなくなる。
澤上の声だけが聞こえる。

「お前の存在、そのものが憎いそれでええか」

バタン――。

「さ、澤上……さま……くっ、ひくっ、えぐっ・・」

メイドの目の前のドアがもう二度と開く事はないだろう。とメイドはドアにうなだれて泣き始めた。

――しかし、そのドアは意外な事で開くことになる。

第6話 『夕暮れに涙』

「第6話」 夕暮れに涙

「ねえ、字原さん^{あはらさん}って好きになつた人っています…？」

「好きな人？」

「はい」

僕の傍で掃除をしている世話役メイドの音緒^{ねお}は不意にそんな事を聞いてきた。くすぐったくなる様な質問を何分かおきにしてくる。さつきは好きな食べ物から始まり、好きな音楽、好きな芸能人、どんなタイプが好き、という性格の人が好きだったり、一方的に音緒は僕に質問を浴びせてくる。聞いてくる話がどんどん恋人寄りになつてるのは明らかに不自然だ。

そんな、気恥ずかしい雰囲気何とかごまかそうと僕は箒をバタバタと動かしていた。

「いないな、気になる子はいるけど……」

「え！？」

途端、音緒は真剣な顔で近寄ってきた。

う、ジッと見られてる……。

「髪の毛真つ赤な女の子んだけど、水着みたいな服着てて変な子だと思つたんだけどね」

音緒が一生懸命になつて僕の話聞いていた。ほつきはもう握られているだけだった。

「…それでね。さつきアイスあげたら、お礼につて噴水の水を凍らして猫の氷像作ってくれたんだ。どうやってって聞いたら魔法使いだからだって。おもしろいでしょ」

僕が言うと、胡散臭そうに瞼を半分下げて僕の方を見る音緒の目があつた。

「…いくら字原さんだからって、笑っちゃいます」

うん、音緒の目は明らかに笑ってない。

「確かに、氷の像はありましたけど…でもあれは夏用に公園に置かれたモニメントでしょう？ 前から公園内で夏向けのイベントの通知がありましたし。ちなみに昨日は氷のライオンでしたよ」

「……………」

何という偶然だろうか。まさかそんなイベントと被るなんて、当分あれは溶けないって言っても信じてもらうのには時間がかかりそうだ。エーラが魔法を使ったあの場には誰もいなかったので、第三者からの立証も無理だろう。そんな事より、と音緒は言った。

「ま、真面目に聞いてるんですよっ！さっきから掃除してるふりして……………」

僕はポリポリと頭をかいだ。こうなったら僕はかたなしだ。

「わ、わたしはっ……………」

突然、音緒が僕の手をぎゅうつ！と握ってきた。ガタン、筥が地面に落ちた。

「あ、あなたが好き……………なんです」

「……………」

（……………ぐ、やっぱりか）

さっきから彼女は執拗と言うほどアプローチをしてきた。どんなタ

イプが好きと聞かれ、僕が大人っぽいのが好きと言えば、『わたし・・がんばって大人っぽくできますよ……』と言い、どういう性格が好きと聞かれ、活発な子が好きだと言うと、『運動とかは嫌いですけど……がんばって……』と小さく言い、僕が、わざと音緒とは逆の性質を言えば音緒はがんばって、こちらにあわせてくる。

この子が僕を思う一生懸命な気持ちはだれにも勝るものだろう。出来れば付き合ってあげたいところだが、この子は僕よりひとまわり年下で、幼い。13歳位の女の子に恋愛感情はむけられない。言い難い沈黙が続く――。

すると、僕の手を握って、俯いた彼女は僕を恐る恐る見上げてきた。
・・・それでも、言うしかない。

「・・・ごめん。君はもつと素敵な人を見つけれ時間がいっぱいあるんだ。今からそれをいたずらに浪費する事は・・・」

「あの」

消えそうな音緒の声がした。

「しゃがんで・・・くれますか」

「?・・・いいよ」

僕は言われたとおりにしゃがんだ。音緒というメイド服の女の子の顔が、涙を浮かべて笑っていた。

「目……つぶって」

音緒の声は涙ぐんでいた。掠れた声で僕に頼む彼女は愛おしく思えた。

僕が目を瞑ると、何もない闇になった。瞼の向こうで、音緒の気配

がする。

誰もいない公園、視覚を排した僕の意識は目の前にいる小さな少女の気配にのみ注がれた。

こっん…………

不意に、僕の額に固いものがあたった。僕は目をつつすらあけた。

「え〜〜んっ！！ひぐっ！！…………えぐっ！！〜〜っ」

目の前には目をはらして音緒の泣きじゃくる音緒の顔があつた。音緒は僕の顔をぎゅうと抱きしめて、言いようのない気持ちをさらけ出し、泣いていた。ふと、僕の目の前の音緒の顔がじわと潤んだ様な気がした。僕の目からも涙が溢れていた。

公園はすっかり夕暮れに包まれ、オレンジの淡い光がいつまでも泣きじゃくる天使をやさしく照らしていた。

/

「また、見つけたか」

自然公園シルベアから数キロ離れたケミカルガーデン本社ビル内。

ケミカルガーデンの総括者、与塚よつか一樹は満足げに頷いた。

そして、与塚は革張りの椅子にもたれ、ニヤリと笑った。その笑みは威厳に満ち溢れる絶対強者としての余裕の笑みだった。

第7話 『実験都市の暗部』

「第7話」 実験都市の暗部

第6居住区のマンションへと帰る字原の足取りは重かった。

音緒は、あの後何度も謝って、それでも気丈な笑顔をを見せて帰って行った。

残された僕が帰ったのはもうすっかり日も暮れてからだった。

「はあ……」

もう何度目だろうか、僕はあの時から何度も何度も溜息をついていた。

辺りはすっかり暗くなつて人通りもまばらになつてきている。この時間ならアーケードの方は更に賑わっている事だろう。

しかしここは各居住区間をつなぐ連絡用人道通路だ。僕がここに来たときは、バス（もちろん無料の）だったが、そんな事も考える余裕はなく、一人ぼつぽと、長い道路を歩いていた。

そんな自分はまるで孤児の様だと僕は思った。

「嘘でも好きって言えば良かったのかな……？」

歩く僕が呟くのは、いつまでも後悔の言葉だけだった。

午後9時、第6居住区404号室。

僕は、ゆらゆらと流されるようにマンションの部屋に入った。

部屋に戻っても、気持ちは落ち着かない。心が宙に浮いた様な気持の悪い感覚だ。

「……まだ、あの子の事考えて……」

何で、何で僕は素直にあの子の感情を受け止める事が出来なかった・
・

真つ暗な部屋の中、僕はぼふつ、とベットに倒れ込んだ。

部屋の中で一人になると、外にいた時より後悔が押し寄せる。罪悪
感で死にそうになる。あんな無垢な少女を泣かせてしまったことへ
の自分の愚かさを憎む。

（失敗だ……僕は、また失敗をしてしまった……。）

すると、ドアの方からドンドンとドアを叩く音がした。

「字原つ。帰つとんのか？」

「……！？」

びっくりした。澤上の声だ。怒鳴りつける勢いで僕のドアを叩き続
けている。

人の気も知らずに、あいつは……

僕は無視することにした。僕はその内諦めるだろうと高をくくって
いた。

ところが澤上は1分、2分とドアを叩き続けている。その音はま
すます激しくなってくるばかりだ。

「……………ったく」

僕は澤上を黙らせるべく、しびしびベットから起きあがってドアを
開けた。

目の前には少し息を切らしている澤上の姿があった。澤上はドアを

叩いていた手を持ち上げたままで、安心した様に僕を見た。

(……?)

妙な奴だ、と思った。澤上が持ちあげた手にはハンディタイプの使い捨てカメラが握られていたからだった。

「……ああ、良かった」

澤上はほっとした様に持ちあげた手を降ろして僕に言う。何が良かった、だ。

「……澤上はこんな夜中に僕に被写体になってくれて言うのか」

僕が文句たらたらにそう言う、と澤上は違う、とハッキリと言った。澤上の顔が急に陰しくなる。

「逃げる。この街から、直ぐにや」

「……………は？」

僕が澤上の顔を伺うと、澤上の顔は真剣だった。

「……………あれ？澤上の顔に何かついてる…………？」

ここ一帯は薄暗くて、澤上の顔がハッキリと見えないので僕は玄関の電気を点けた。

僕は驚きに目を睜^{みは}った。

「澤上……お前……………!!」

澤上の顔の節々には殴られている紫の痣が沢山あった。左目も、半分は開いていない。

「ああ。チェック役の『メイド』や。あの餓鬼、俺を殺そうとしやがった」

「え……？」

澤上が、ほれ、と澤上の部屋に僕は連れていかれた。澤上が指さすその方を見ると暗い部屋の中、物があちこちに散乱していて、強盗にでも入られたかのような惨状だった。その部屋の奥で、澤上と同じくらいの歳のメイド服を着た女が倒れていた。そのメイド服は血にまみれて、暗いマンションの一室をじわじわ真っ赤に汚していた。

「嘘だろ……？」

僕は部屋の惨状を見て茫然とした。

「いや、ホンマのことや」

澤上は息を切らして、かつ、冷静に言う。

「そうじゃないっ！！お前が……！！お前が、この子を殺したんだろっ！！」

僕は澤上に掴みかかった。

澤上の襟首を掴む腕に力がある。

「こんな……女の子じゃないか……？そんな子がどうして、お前を殺そうとするんだよ！！理由なんか」

「どけ、餓鬼」

澤上が僕の腕を強引にふりはらった。

「がっ……！！」

凄まじい力で澤上の腕に振り落とされた僕は、壁に背中を勢いよくぶつけた。

澤上はズカズカと、倒れたメイド服の女に歩み寄る。

「な……なにを……」

「お前のどこにも来たやろ。メイドが。あいつらはなこの街での監視役つてのもあるけど、それだけやない。こいつらのホントの目的は超能力者の覚醒補助って役割があんや」

「・・・超能力？」

超能力と言つて、僕が思いつくのはスプーン曲げや瞬間移動といったものだ。

「よお、考えてみる。この会社、ケミカルガーデン社は何千もの人間に何の不自由なく暮らせる環境を提供してる。しかもタダでな。アホらしと思わへんか？　いくら人工島のテストケースやからって普通は疑うもんやろ」

・・・確かに。澤上に言われてみるとそう思う。現に僕のような人間でさえ、このケミカルガーデンに受け入れてもらったのだから。

「企業はボランティアやない。んなもん常識やろ。企業の目的は利益のみや」

「・・・」

「与塚一樹よつかかずき、この街の、ゆうたら元締めやな。こいつが、世界各国に自分が作ったこの街で行っている人体実験の成果を売つとる。その人体実験の目的は無論、人類に隠された力——超能力や。それを発見、開発するためにこの街の裏における本社の科学者は倫理的な手段を廃して人間を数十日監禁して、催眠、培養した臓器の移植、違法薬物の投与、虐待・・・イカれた実験ばつかしとる所なんや」

澤上の言葉はウソには思えない雰囲気があったが、僕はすぐにはのみこめない。

そんなおかしな所ならもつとこの街の問題が世間に行きわたっていてもいいじゃないか。澤上は、いや、と首を振った。

「俺はな、訳あって、ここの事を調べようとしてたフリーの記者やつた。でも、この街は認められた一部のマスコミしか通してへん。それだけでもおかしなもんや。そこで、俺は何とかこの街の中の人間とコンタクトを取ろうとした。すると、内部の研究員やった奴が俺のどこに来了。——逃げ出して来たんや。人体をいじくりま

わす研究に嫌気がさしてな」

澤上はその後、更に続けた。

逃げ出してきたその研究員は、ケミカルガーデン内の暗部を余すところなく、澤上に語ったらしい。泣きながら、自分のいた所を恐怖するように。ちなみにその研究員が逃げてこられたのは、月に1度来る、外部からの実験機材搬入用のトラックに紛れて逃げ出して来たというのだ。研究員も、殆ど監禁状態にあつたらしい。

「そいつはな、自分のおつたこの場所の事をこう呼んでたわ。『実験都市』ってな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

ここに来るバスの中。この街を見据えるところで澤上が途端、真剣な顔をしてそれと同じ事を呟いた。

人を人と思わない実験施設。実験都市。

「国が何も言わないのは・・・・？」

「この街で行われてる実験はこの国にとって膨大な利益をもたらしてるからや。天然資源が枯渇する寸前まで来とる今やからこそ、新たなエネルギーが必要になる。俺のここに来た研究員が言つとったけど、超能力はノーコストで自由に火を出したり、風を吹かせたり、物を動かしたり、出来るらしい。そう言う化け物が既に何人かこの街で出来とるらしい。恐らくそういった能力は軍事、医療にも転用できるやろから文字道理、世界中が欲するわけやろ。ウマい事に、本社は各国の支援団体から貰ったアホみたいな量の実験費用その何割かを国に流して、この施設の正統な物として認めさせてる・・・・」

「じゃあ、あのメイドの女の子が澤上を襲つたのは・・・・」

「ああ、口封じやろ。ただ、俺はあいつらの事も聞いとつてな。あれは疑似人格『neo^{ネオ}』の実験装置。無害やとは聞いてた。何分か前から来とつたんやけど、ドアブツ壊して入ってくるとは俺の予想外やった。人の体を弄びやがって胸糞悪い・・・・」

人？ 澤上の言い方に引つかかる。

「澤上、さつきはこれ、ロボットって言ってなかったか？」

「ああ、『中身』はな。見たら、これは解剖用に提供された医療用の死体をベースに機械を植え付けてるんや。」

目の前の女が更に恐ろしくなる。ひょっとすると、音緒も元は死人で、ロボットになったのか。つい、数時間前の事を思い出すと吐き気がする。

僕が口到手を当てていると、澤上は震える僕の肩に手を置く。

「わかったやろ。これがこの街の真実や。あえて、今まで言わなかったんも信じてもらえんと思ったからや。常日頃からこの街の良いイメージしか見せつけてこられたお前にはな。わかったら、すぐにこの街から出る。今は何でか知らんけど不気味なほどに人影がない。恐らく、本社の方の指示やろ。これに乗じてとっと逃げろ。」

「澤上は・・・？」

「俺は、この街の真実を暴いて公表する。そうすればお前もあいつみたいに本社に殺されることも無い」

「あ、『あいつ』って？」

澤上はそう聞かれるのを知っていたように僕に言う。

「俺のところに逃げてきた研究員や」

第8話 『研究者 与塚一樹』

「第8話」 研究者 与塚一樹

「はぁ・・・はぁっ・・・!!」

僕は誰もいない夜のケミカルガーデンを走る。

走る僕の右手には澤上から渡されたハンディタイプの使い捨てカメラを持っている。

これは、澤上がメイドに襲われた時に使った物らしく、カメラを改造した即席のスタンガンらしい。スタンガンの電圧は人体には致死量のものらしいので扱いに気をつけるようにとの事だった。

澤上が教えてくれた脱出路は、僕がさつき行った第3居住区の自然公園『シルベア』の中央にあるマンホールから逃げられるそうだ。そこに、機材搬入用の道路と繋がっている扉があつて、その道路から外に出られるとのことだ。

居住区間の長い連絡通路を走って、僕はようやく第3居住区に辿り着いた。

沢山の建物が並ぶ誰もいないアーケードを月明かりのみが照らしていた。それは、夜、閉鎖された遊園地の様に異様な光景だった。物音は一つもない。耳鳴りがするくらい異様な静寂がこの一帯を覆っている。

しかし・・・

（なんだろう・・・？何かの気配がする・・・）

人は見渡してもどこにもいない。でも、この心に押し掛かるような悪寒の正体が解らない。

でも、僕は、今日これに似た悪寒を体験したことがある。

「ピ」

（なんや、字原の部屋か……？）

第6居住区。つい先程、字原を送り出した頃、澤上はピーと音をあげる字原の部屋に入っていた。澤上が字原の部屋に入ると、真っ暗な部屋の中、パソコンの画面が音を立てて、光っていた。

「！？」

澤上が、慌てて音を発するそのパソコンの画面を見た。嫌な予感があると、澤上の直感がそう、告げていた。その通り、澤上の予想が的中した。澤上は恐ろしい事を克明に告げるその画面を見て、ゾツとした。

「っ……！！字原、もう着いてんなよ！！」

澤上は慌てて部屋を出て、字原を追った。

澤上が見たいまだにピー音を放つ、パソコンの画面にはこんな文章が映されていた。

『字原彰様。^{あむはのあむひ}この報告を受け次第、第3居住区、自然公園「シルベア」へ至急、向かって下さい。到着次第、担当の音緒に従い行動するよう、くれぐれもお願ひ致します』

/

「超能力の強制的な開放への可能性——」

暗い、校長室の様な部屋の中で、ケミカルガーデン全体の総括者、与塚一樹はそう、呟いた。

与塚自身はいずれ、このような事になるだろうと感じていた。

今日の昼頃、突如ケルノウが与塚の元へとやってきた。

「今日の夜11時以降、そちらの第3居住区の公園に用があります。よけいな犠牲を出したくなければその一帯、いや街全体でしよう。人を外に出さないように」

与塚はケルノウに聞いた。

「理由は？」

答えが返つてくるとは思わなかったが与塚は聞いてみた。すると、意外な事にケルノウは応えた。

「・・・困った事に貴方達だけでなく、私をよく思わない輩がいましてね。どうやら激しい戦闘になると思います」

言葉とは裏腹にケルノウの口調は与塚を脅した時のようにどこか嬉しそだった。

「犠牲者が出る・・・そう言ったな」

「はい」

ケルノウは当然のように言った。

「なら、その時間に私の実験体を数人そこへ送り込む」

与塚の声は驚くほど冷静だった。ケルノウは肩をすくめて、おやおや、と芝居じみて言った。

「私に反抗するのですか？それでは——」

「いや」

「・・・？」

ケルノウは首を傾^{かし}げている。

「全員殺せ。遠慮なく」

ケルノウは、与塚の顔を伺った。与塚は歪んだ笑みを浮かべていた。それは、とても人間の顔とは思えなかった。

ケルノウは可笑しくてたまらないと言う様に嗤った。

「ははははは！！ 気でも狂いましたか？ そうやって無駄に犠牲を増やす事に何の意味があるんです？ 解っていないでしょうから教えておきますが、私は人間ごときに殺されるような――」

「解っている。ただ、実験体が死ぬ間際というのは今までにない稀有な状況だ。そんな状況でこそ、彼らの秘められた能力が出るかもしれない。もしかすると君が欲している超能力が見れるかもしれない。派手に殺してくれ」

そう言うつと、与塚は革張りの大きな椅子に凭れかかる。

『魔法』ケルノウは目の前の『人間』与塚一樹を見た。

「……人間に貴方の様な人がいるとは思いませんでした」

ケルノウの声には嘲るような雰囲気が出ている。

「実験都市を作った時から人間などやめているさ」

ケルノウが帰って行って、それから数時間後、与塚は疑似人格『neo』に実験体との接触による検査をさせ、現段階で能力者の資質が比較的高い者を選定した。今、それによって選定された18人がケルノウの犠牲になるだろう。たとえ実験体が逃げようとしても、『neo』はそれを許さない。万に一つ、生き残ったとしても暗部を知ったとして実験体はどのみち与塚は殺すつもりだ。

与塚にとっては18人のうち、一人でも超能力を一瞬でも発現して死んでくれればいいと考えていた。

第9話 【魔法／ケルノウ】

「第9話」 【魔法／ケルノウ】

第3居住区、自然公園『シルベア』――

「・・・・・・・・？」

字原が園内に入って数分、街のあちこちが消えていた街灯だったが、公園の噴水のある大きな広場だけ妙な程、明るく照らされていた。その広場には――

「人がいる・・・・・・・・？」

何と、照らされて昼間の様に明るい広場には人ばかりがあつた。

「メイド服・・・・・・・・？」

その人たちの服装は全員同じメイド服だった。

妙な事に、そのメイド服の女は何かを囲んで機械の様に真っ直ぐ立っていた。

輪のように広がったメイド達の中央には僕のような歳の子や、30歳位の大人まで色んな性別、年齢の人たちがいた。互いに一歩も動こうとしない。

「な、なんだ・・・・・・・・あれ・・・・・・・・？」

僕はその様子を遠巻きに眺めていた。あの場に行けば僕も澤上のように殺されそうになるかもしれない。恐怖を押し殺すように、僕は右手に握った即席スタンガンを握りしめる。

すると、公園の真上から妙な物が見えた。

宝石でつくられた様な、きらきらと光を放つ大きな人大の発光体がふわふわと夜空から降りてきた。それは公園の灯を受け、一層輝いた。

さつきからあつた嫌な雰囲気が増す。

メイドに囲まれた人々が降りてくる光り輝く宝石を見て騒ぎだす。その声は恐怖に満ちていた。

嫌な雰囲気を形にした様なソレは、ようやく、公園に接地した。

ぱりいん

辺りにガラスを割ったような音が鳴り響き、空から降りてきた宝石が中から割れた。

宝石の中にいたのは人だった。割れた破片は地面に吸い込まれるようにゆつくりと消えていった。宝石の中にいたのはスーツ姿の男だった。

「っ……!!」

スーツ姿の男の近くにいた人たちの何人かが悲鳴をあげた。

僕は必死で声が出るのを抑えた。

そのスーツ姿の男の顔は公園を照らす街灯の所為でよく見えていた。20代くらいの健康そうな体、しかし、顔だけはしわくちやの年寄りだ。左右非対称に伸びた青い髪、グリーンに光る^{よむ}澱んだ目。とても人間の姿とは思えない。

男が口を開いた。

「おやおや、皆さま。こんな夜分にお集まりいただき、申し訳ありません。私は『魔法』、名前をケルノウと申します」

ケルノウと名乗った男の声は老人のしわがれた声だった。

ケルノウは続けた。

「突然ですが、私はあなた達を殺さなくてはいけないのです」

メイド達に囲まれた人々の騒ぎが大きくなる。

叫び声も混じっている。人々の恐怖は頂点に達していた。

「皆さんには、超能力というので生きる可能性が残されているそうです」

人々は話を聞く耳を持つほど冷静ではなかった。

阿鼻叫喚の渦、ただ、その前でケルノウだけが冷静だった。ケルノウは音も無く手を振り上げた。

「さあ、皆さん、神に祈りましょう。無慈悲な神でも、ほんの少しの慈悲は皆さんへ平等に与えられるでしょうから」

ケルノウは振り上げた手を降ろそうとする――

不意に、聞き覚えのある声がした。

「へえ、今までずっと逃げたきた臆病者が出てきたらと思えば牧師の真似ごと?」

つかつかとどこからともなく一人の少女が現れた。

見覚えのある姿。

水着の様な服。

グリーンの目。

彼女の真っ赤な赤い短髪が生き物のように揺れる。

ケルノウの目線の前、歩いてきたのは今日の昼、アイスのお礼に猫の氷像を作ってくれた――

「来ましたか。零下の魔女エーラ」

「今晚は、やっぱりここで良かったのよね? 伏在^{ふくざい}の魔法使いケルノウ」

「ええ――。待ちわびました」

ケルノウはエーラをうつとりする様な目で見つめた。

本当に長い間探し求めた、待望の品を見つけたように、目は緩んでいた。

それより、とエーラは言った。エーラの声は揺らぐことなく、昼に僕と話していた時の様な声だった。

「ねえ、ケルノウ。あなたは今まで逃げてきたから忘れてると思

うけど。その人たちを殺しちゃっていい訳？殺したらどうなるか――

「解っていますとも。魔女エーラ。魔法はどんな奇跡も起こす事が出来る。また、その力は純粹で何物にも穢けがされない清純な力、この法則がある限り、魔法使いは魂をもった者に手をかける事が出来ない」

エーラは満足そうな顔をした。

「そう、よく覚えてたわね。殺したらその人たちの魂がたちまちあなたに取り憑いてあなたは混濁した魔力という自己を保てずに四散しちゃうって事も覚えてる？」

「ええ」

ケルノウは笑いを押し殺しているように口を歪め――

「解っていますとも」

そのまま、振り上げた手をおろした。

「！！？」

エーラは素早くケルノウの視線の先から飛びのいた。

瞬間。

ケルノウの手が虹色に光ったと思うと、レーザーの様な真っ直ぐな光が幾つも束のように現れて、エーラがさっきまで居た所まで伸びていた。その光の束はさっきまでいたメイドや人々も跡を残さず太い一本の光の柱となっていた。光がやがて消えうせる。

それまで落ち着きはらっていたエーラの顔が陰しいものになる

ケルノウは狂つたように大声で嗤つていた。それにはさつきまでの
懇懃無礼な態度は消え失せていた。

「ギヤハハハハハハハッ！！！！ヒャーーーーーハハハハハハハッ！！！！見たか！！見ましたか！！！！さぞ驚いたでしょうーねええ！！？」

第10話 『転生した魔法使いと在り続けた魔法』

「第10話」 『転生した魔法使いと在り続けた魔法』

「ケルノウ・・・！あなた何故・・・！？」

エーラは目の前で冷静さを失って嗤い転げる化け物を睨んだ。

ケルノウは笑いを堪えるので必死だった。

「何故？何故？？何故？？聞きたい事は解っていますよエーラ。どうして魔法使いの身で有って人間を殺せるかという事でしよう？しかし、そもそも私は魔法使いではないのです」

「『魔法使い』じゃない？冗談言わないでよ。あなたはさっき魔法を使っただでしょ？」

エーラの声は冷静を取り繕っているようだったが、目の前の出来事に驚いているのは僕の目にも明らかだった。

「貴女は考えた事がありますか？今の貴方達のように魔法使いとして転生を繰り返す前の最初の魔法の事を。彼らは永遠の命を持った故、何千何百もの遠大な時間を彼らは生き続けました。その過ぎる時間の中。やがて一人の魔法が狂ってしまいました。彼女は自分もろとも全ての魔法を滅ぼそうと考えたのです。魔法がこの世に顕現するための魔力は存在するだけで人々に邪念を与える元となっているからです。人の世に長く居すぎたのでしょうか。人への慈愛が彼女をそうさせたのです」

「彼女はやがて幾人もの魔法の手によって滅ぼされました。しかし、彼女を倒した魔法達の中で一つの不信が生まれたのです。『いずれ我々も彼女の様になってしまうのではないか』と。そこで、魔法は自らの肉体に限界を定め、それが訪れた時は他の誰かに『魔力』と生きていたころの『使命』を預け、転生する事で新たな命とし、

それを繰り返す事により、『魔法使い』となる事で遠大な時間を生きようとしたのです。しかし、魔法を人間に依存し、魔法使いになった事によって魔法を使うものにとってある欠陥が浮き彫りになったのです。純粋な魔力を人に転生した為、純粋な力である魔力の純度を保てず、やがて満足に行使することが出来なくなり、『魔法使いは人を殺せない』という欠陥が生まれたのですよ。……もう、利口な貴女なら私が何者が解ったでしょう？」

「私は、その魔法使いとして、転生を繰り返す前、人を殺める事が許された原初の『魔法』／ケルノウなのです」

エーラの顔がみるみる青ざめる。その顔には最早、表情も取り繕うも余裕もなく、驚愕していた。

「う、嘘でしょ……？数千年も前から人として意識を保っているなんて……！」

信じられない。とエーラは言う。ケルノウは彼女の前で淡々と話す。

「かつて多くの魔法が人に転生する中、私だけが今まで転生せずにいたこの世でただ一人の原初の魔法。オリジナル『伏在』ふくざいと呼ばれ、魔法同士の争いの中、ただ一人、私だけが逃げ続けたのは、『魔法』という人を殺めることが許された存在で、貴方達、魔法使いを全てをこの世から根絶やしにする為だったのですよ。魔法同士が争い始めたあの時、狂った魔法は彼女だけではなかったのですよ。このケルノウという魔法も、同じように狂っていたのです」

ケルノウの顔がニヤリと歪んだ。

「貴女が来る事は解っていましたよ。その為に私はこの街を魔力によつて脅かしたのですから。貴女の使命は『魔法で人を脅かした者の排除』でしょうから。さあ、私を殺すのでしょうか？私はたかだか人間を滅ぼせるだけの魔法です。魔法使いの貴方達とは『実力』は大差ない筈ですから。」

エーラの表情が畏怖から狂喜のソレに変わった。

「そうね。ゆつくりと凍っていくといいわ 伏在」

途端、エーラの周囲を虹色の光の粒が渦巻いた。それはさながら地上のオーロラだった。月の光を受け、幾多にも色を変える光の粒はケルノウのいる一帯の温度を急速に低下させる。

その一帯の木々があつという間に一切の水分が凍結し、氷と化し、いつしかケルノウの周りは氷の国になっていた。

ケルノウの黒いスーツが一瞬にして真っ白になる。

マイナス何百度もある絶対零度が一瞬にして生まれた。

恐らくこれが「零下の魔女 エーラ」と呼ばれる所以なのだろう。

圧倒的な自然の圧力。相手に息をする間も与えない。これらの事象は時間にして4秒の間の出来事で、決着は一瞬でついた。

真っ白になった、二人の魔法使いがいた銀世界の中、勝利を確信したエーラの前にはピクリとも動かない『さっきまでとなんら変わらぬ、黒いスーツに身を包んだ化け物。伏在 ケルノウ』がそこにいた。

「……馬鹿ですか。あなたは」

変わらない、慇懃な口調のまま、ケルノウは目の前の魔法使いに言い放った。

エーラは目を瞠った。

「信じられないような顔をしないで下さい。私は、魔法使いの様に人間という物質に依存していません。私は魔力の集合体であり、人間が『魂』と呼ぶ存在に限りなく近いものです。形を持たずに一定の概念の上に成り立つ『伏在』の存在です。つまり、貴方はガスの塊に剣を突き立てているのと同様なんです。」

「あ、あ……………」

エーラが眼の前の魔法から後ずさる。

「フン、恐怖ですか、情けない。とても、魔法の器だったとは思え

ませんね」

ケルノウの腕が光の束を打たと真上にゆっくりと上がる。その様は鎌を振り上げる死神を彷彿とさせる。

「良いでしょう。同胞のよしみです。苦しむ間もなく一瞬で殺してあげましょう。さあ、祈りなさい」

「どうして・・・この街を襲ったの？」

エーラは掠れるような声で言う。その言葉は遺言の様に細い声だ。
「理由……ですか」

ふりおろそうとする腕が止まる。やがて、

「——貴方には関係のない事です」

ケルノウから放たれた光の束がエーラに向かって飛んでゆく。

寸前——

「このっつ——馬鹿野郎ツツツ!!!!!!!!!!!!!!」

僕、あつはひ字原 彰あきひは二人の前に飛び出していた。

第11話 『救いを求めて』

「第11話」救いを求めて

—— 殺される。

私は何千年前から『零下の魔女 エーラ』から受け継いできた使命と魔法、そして魔法使いエーラとしての存在を眼の前の『魔法ケルノウ』に奪われようとしていた。

真つ暗な夜の帳の中、ケルノウは腕から伸びた光を収束させて一際輝いて見えた。それが最期に私がとらえる光なのだろう。そう、思った。

「このつつ—— 馬鹿野郎 ツツツ！！！！！！」

不意に、どこからか大声がした。男の声だ。

男の大声は私が作った氷結した空間を切り裂くような鋭い声だった、

その声には聞きおぼえがある。

—— ちょうど、ここと同じ場所で。

/

ケルノウは獣の様なグリーンの眼を輝かせた。

「おや、殺しそこないがまだいましたか」

（今日のお昼の子・・・？）

ケルノウの人と思えぬ声色にゾツとする。

僕の手には澤上のハンディタイプの即席スタンガンが握られているが、武器がこれだけとは非常に心細い。それに、さっきケルノウはあんな吹雪の中で平然とたっていたのだ。眼の前の敵に 『人間

字原 彰[『] が物理的に勝利するのはまず不可能だ。僕は忌々しげにスタンガンを投げ捨てた。

「しかし、不愉快ですね。貴方の様に数百年も生きれない脆弱な人間が私を虚仮^{コケ}にするとは」

途端、そのすぐ傍から聞き覚えのある女の声がした。

「早く・・・逃げなさいっ!!」

足もとを雲のように漂っていた霜が一斉に辺りに渦を巻く。

目くらましだろう。エーラは、僕が逃げれるようにしてくれた。

「おや、エーラの知り合いですか？ しかし、見た所普通の人間だ。逃げた所で私が全方向に対し攻撃をしますから命はないでしょうが。

――？ おやおや、動かないとは大した度胸だ」

「え...？」

僕は、ひきつつある、霜の渦の中。真っ直ぐにケルノウを睨みつけていた。

僕はもう、逃げない。

女の子が傷つくのをこれ以上見たくない。

音緒^{ねお}や澤上のメイド、そしてケルノウによって殺された人たちの姿が脳裏をよぎった。

彼女たちは二人とも、恐らくあの澤上の部屋のメイドも救いの手になかったんだろう。だから、彼女たちは『人間』として死んだ後。解剖用の死体ベースのロボットでも絶望を感じたんだろう。

ケルノウによって殺された人はどういう事情で殺されたか解らず、最期の最期まで、恐怖と絶望にくれて死んでいった。

救いのない絶望を僕は何度も人生において失敗して味わってきたから気持ちは嫌というほど知っている。

どこにも押さえつけようのない胸をギリギリと締め付ける思い。

救いというものは誰かが差し伸べてあげないと救いにはなり得ない。僕は、エーラがケルノウによって殺されそうになった時、思わずケルノウの所に飛び出していった。

理屈ではない。これは僕の問題だ。

僕が彼女^{エーラ}の最期の『救い』になろう。そう、考えていた。

「勇敢ですね少年。しかし……」

ケルノウが僕を見て――

一瞬の出来事だった。

「痛――？」

左腕が針で刺された様にチクリと痛んだ。僕は慌てて、痛んだ腕を見る。

「う、うわあああああああ！！」

腕はまるで、クッキーの生地^{生地}に型をくりぬいたように丸く細長い穴が虫食い状にポツポツと夥しい量の穴が空いていた。何十本もの鉛筆を突き刺した様な左腕はもう動かす事が出来なかった。

やがて、想像を絶するほどの激痛が襲う。麻酔が切れたように左腕はじわじわと悲鳴を上げる。

「勇氣だけではいけませんね。馬鹿野郎」

僕は、痛み^{痛み}のあまり、左手を抱き寄せたが、血がどくどくと出て、酷くなる一方だった。

「いやあああああ！！」

エーラが冷静さを失って半狂乱で叫びをあげる中。

ケルノウは落ち着いたようにニコニコと笑っていた。

「痛いでしょう？ それは魔力という私自身なんです。私自身は純化された魔力で構成されており、それらを糸のように幾重にも編み込み、一本の魔力の糸として素早く体中から放出し、対象に向かつて伸ばすことで攻撃しています。魔力の糸は決してこの物質世界の干渉を受けずに『そのままの形』で特定の空間を伸び続ける。一本の威力は微々たるものですが、形を変えず、直線として空間を突き

進む系は如何なるものを突きとおし、あらゆる装甲を無意味なもの
とします。これが、魔法と人間との決定的な戦力差です。お分かり
になりましたでしょうか？」

「あが、がが」

声にならない叫びが僕の喉から漏れ出る。

痛みのあまり、ケルノウの声は殆ど意識して聞けなかったが、僕
は自分の敵が人類を超越した化け物だという事は解った。

(……『化け物』?)

化け物と言え、この公園に来る前に澤上が言っていた事を思い出
す。

この実験都市にはすでに超能力を使える化け物がいる事を。

そうして、そういう人たちは既に社会から外れた所で監禁され陰惨
な実験を受けている――

この都市に来る前の事を思い出す。ケミカルガーデン(実験都市)
では最先端の医療が約束される。メイドによる過度な健康チェック。
そうして、外部との露出を拒むガラスのドームの牢獄。ケミカルガ
ーデンの入所テストにおいて、様々な状況においての心理・行動調
査。抽選に当たった事のない僕のような人間にケミカルガーデン応募
資格が与えられた。

今までの事から察して一つの答えが出てくる。

(僕も…化け物か……)

/

「さっきでは足りないでしょう？ もつと痛みを差し上げましょ
う。今の私は非常に不愉快です。せいぜいこえす嘔って頂きましょう……

!!!」

ケルノウが再び手を伸ばす。先から光の糸が数本出て字原の腕、脚
に至るまで抉り続けた。肉食魚ヒラニアに全身をついばまれる様な苦痛の渦

に耐えきれず、字原は地面に倒れ込んで抵抗できずにいた。
一本。また一本と。ケルノウは少しずつ糸を増やして、字原を蹂躪してゆく。

字原が痛みに呻く声は次第に大きくなってゆく。

「…………やめて」

エーラは何もできずに目を伏せている自分が堪らなく嫌だった。
ケルノウには手を出せない。字原の体をエーラの魔法でどこかへ移動させようとしても、ケルノウはそれを見逃さないだろう。限りなく伸びる魔力の系は何処までも付きまとうだろう。

気付けばエーラは目を伏せたまま泣いていた。

際限なく溢れる大粒の悔し涙が頬を伝い、今や零下の地面を濡らす。

（悔しい……………!!）

（私は、私なんか、死んでもいいのに…………ツ!!）

（どうして、あの人が傷つかなきゃ、殺されそうにならなきゃいけないの…………？）

（なんの関係も無く飛び出してきて…………あのお昼のアイスの時と一緒に…………）

（何で…………なんで…………ツ!!）

「貴方が酷い目にあわなきゃいけないの…………」

————バキイイイイイ!————

「ガアアアアア————!!!??」

勢いのある音が零下の広場を伝う。

声は何者の声か判別が着かなかった。

声の主は何者かに殴られ、地面に倒れ込んでいた。

エーラは目をゆっくりと上げる。

エーラの絶望に暮れた目に映ったのは、

『救い』だった。

「な、何をした——人間がア——！！？」

『魔法 ケルノウ』は眼の前の男——『人間 字原 彰』に叫んだ。

エーラはくずおれたケルノウが睨みつけている先を見た。

そこには、今日の昼にアイスをくれた少年が傷だらけの姿のまま立っていた。

少年は、泣きじゃくる子供の様なエーラを見つめた。

少年と眼が合うと、少年は私に向かって声をかけた。

「エーラ」

少年の息も絶え絶えで、かろうじて絞り出した声にはある強い意志を感じさせるものがあつた。

「お前を失望させたまま、死なせるかよ」

「……………！！」

少年の声が、怖い。

この場において、『ただの人間』に救いを求めるのは間違っている。

なのに、エーラは救いを待ち望んでいる。

「救いがないんだったら、僕が『救い』になつてやる……！！」

第12話 『郷愁』

「第12話」郷愁

字原 彰は奇跡的に生きていた。

つい先程まで、字原は魔法 ケルノウによる攻撃によって苦しめられていた。

ところが、今は字原を苦しめていたケルノウは目の前で、苦痛に顔を歪めている。

魔力の糸は字原の体を突き破り、決り続けていた。

字原自身にとっては、魔力の糸に体中を蝕まれる様な感じだった。

そして不思議な事に、体を蝕むその糸がいつの間にか跡形も無く消えていたのだった。

糸が消えたのは一瞬の事で、気がつくと、その時、字原は糸が消えた事に驚いているケルノウの顔を思いつき殴りつけていた。

ケルノウは殴られた頬をぺたぺたと触りながら、幽霊を見たように字原を睨みつけている。

ケルノウの信じられないという驚きと激しい怒りが混じった顔でケルノウは叫ぶ。

「わ…よくも私に触れたな人間——！！」

物質世界において、決して干渉されない身体を持つケルノウが人間に対し『触れ』られた事で今や、慇懃な言葉遣いまでもが瓦壊し、冷静さを失っている。

ケルノウのグリーンの目は燃えるように輝き、攻撃の標的を字原に定め、腕を振り上げる。その腕は今まで以上に魔力を放出するためか白く光り輝き、辺り一帯を魔力の眩い閃光で覆われた。

「死ね、死ね、死ね、死ね」

眼の前の人間に向かって狙いを定める。囁らせる必要はない。

ケルノウは何千何万の魔力の糸を編む。そして――

「死　ネ」

光り輝く白い腕を振り下ろした。

「……！！　につ、逃げて！」

エーラの哀願する様な叫びが響く。

直後、つい先ほどまで字原のいた所は光の河になっていた。

何万何千本もの光の糸はまばゆい光を放って、ケルノウの直線上の一切の物を消滅させる。

――ただ、唯一の人間を除いては。

「ば、馬鹿……な……」

驚きにたじろぐケルノウの前には抉れた地面とその中で平然と立っている字原彰がいた。

ケルノウは顔が蒼白になり、歯をガチガチと震わしている。ケルノウの動揺は怒りから恐怖に変わっていた。

字原自身にとっても予想外の事だった。

もしかすると、一番驚いているのは字原自身かもしれない。

「……」

しかし、字原は知っていた。

この街は、超能力の開発を進める実験都市であることを。

そして、恐らく何のとりえもない自分をこの都市が受け入れ、かつ、鳥かごに入れられた鳥よろしく生活をおくれるのも、

全てはこの街で何も知らずに生きているケミカルガーデンという実験都市に招待された人間達全ては研究対象のモルモットだということを。

（僕にも、超能力は備わっている……！！）

ケルノウの攻撃をかわし、殴る事が出来たのも恐らくそれによるものだろう。

信じられない偶然にせよ、字原彰はケルノウの攻撃をかわし、魔力という存在であるケルノウに対し触れられる能力が備わっている。

ケルノウが先程、手をかけた数人の人たちは抵抗できずに一瞬でケルノウによって葬られた。

恐らく、字原の能力は彼らとはまた別の能力が備わっていたのだらう。

「あ…あなたは……」

震えていたケルノウが口を開く。その声は小さくか細いものだった。

「あの、与塚とかが言っていた超能力者とかいう奴ですか」

「……？」

「与塚…下らない事を」

字原はケルノウの声は聞こえていなかった。

「な、何をブツブツ言ってるんだ!？」

「私に勝ち目はもうない様ですね」

ケルノウの体が、ゆらり、と煙のように揺らぐ。

光の糸がケルノウの体のあちこちから伸びる。

「人間には解らないでしょうが。私は今までこの地球に何万年と存在し続け、意識を保ってきたのは人間にその存在を委ねてしまった愚かな今の魔法使いに復讐するためだったのです。かつての魔法使いである以前の魔法という存在は形こそは人と同じような物ですが、その人々に邪心を植え付けるという性質上、人に愛されず生きてゆくのです。それが魔法としての本来の生き方なのです」

ケルノウの声はケルノウの声は段々と大きくなり、伸びた数多の魔力の糸は折り重なり一つの形を作ってゆく。

「どれくらい前か忘れましたが、ケルノウと言う私は、かつて、一人の女性に恋をしました。彼女はいつも一人で彼女の街の誰からも非難され、嫌われ者として生きていたのです。私はその頃に既に魔法と言う存在の意味を知っており、人と接してはいけない存在だという事は知っていました。しかし――」

ケルノウの声が揺らいだ。ケルノウのグリーンの目が潤む。

「私は彼女の事が好きだった。私は何人もの人にいじめられて一人で泣いている彼女を見て、つい、ある日、彼女に声をかけてしま

ったのです。一人で、周囲の人間から疎外されている彼女に対しての同情かもしれません。その日の彼女はとても優しくったのを覚えています。彼女に苛められていた理由を聞くと、彼女は自分を魔女と言いました。自分は人々を悪夢に陥れる邪悪な魔女なのだと。勿論彼女は魔女ではありません。ごく普通の人間でした。しかし、その時代、彼女の居た国では数年前から大飢饉が起きていたそうで、その原因として魔女狩りが行われていたのです。今ではその事は何の根拠もない、ただの人民の怒りのはけ口にしかなくなっていなかったようですが。彼女の唯一の頼れる母親はある日、何の根拠もなく彼女と言う事で殺されてしまったのです。ただ一人、娘である彼女を残して」

「彼女は母を失い、何日も何日も、意味もなく、際限もなく、ただただ苛められてきたのです。それから、私はたびたび彼女が一人していると慰めに行ってやりました。魔法は人とは接してはいけないというにもかかわらず、私は寄る辺ない彼女の心を少しでも癒そうと努めました。彼女は私と話している時はとても嬉しそうでした。別れを惜しむように、彼女はさよならを言い、私達はいつもそこで別れました。しかしある日……」

ケルノウの声が途端に震える。

「彼女は街の人々を殺しはじめたのです。」

ケルノウの言葉を聞いていた字原は瞬時にさっした。何故、魔法と言う存在が人と接してはいけないのか。それは、魔法と言う存在が無意識に放つ邪心からだ。

「彼女はある日を境に狂ってしまったのです。彼女は私と会うたびに嬉しそうな顔をしていましたが、その嬉しそうな顔は次第に何かを抑え込む様な顔にもなっていました。心やさしい彼女に少しずつ、邪心が芽生えるのを私は解っていた……。しかし……。私が距離を置いてしまうと彼女はまた一人になってしまふ。唯一頼れる母さえ失い、いつまでも泣き続け、やがて、ようやく解放された彼女が、細く切なげに私を呼んでいる……。何れ、彼女がため込んだ邪心

が彼女を苛めた人間たちへの殺意へと昇華する事が解つていても、私は彼女の傍にいたくなくてはいけなかった……！ やがて、彼女は国によって処刑され、私はそこで魔法と言う存在について真に理解する事になりました。人と関わりを持つとすればそれはその人の不幸を生み、それは大勢の人々の死を生み出すのだと」

「魔法使い……人間に転生したことで、人間と同じ機能で存在し、かつ魔法を特定の物質に変化させ行使できる存在。私は、魔力を持った存在を認めない。魔法は人の世にあるだけで害悪となる——私達はこの世に必要なのだよ エーラ。」

気付けば、ケルノウの束ねた糸が一つの形をとっていた。それは、かつてケルノウが恋をした女の肖像だった。

長い髪の一人の女がケルノウの手によって元の彼女の大きさの何倍にも巨大化する。

巨大な彼女の胸から上の肖像が両手を広げ、字原達の前に立ちはばかる。ケルノウの最期の攻撃だろう。ケルノウは自らの全身を魔力の糸にして『彼女』を構成している。

「エーラ。せめて、貴方だけでもいい……。私の手で一人でも多くの魔法使いを……。！！」

悲しみのこもった声で、祈るように魔法 ケルノウはエーラに向かって魔力によって構成した巨大な光り輝く腕を振り下ろす。

その瞬間、字原の全身が瞬時に動く。

「や、やめろっ——！！」

字原は気が付くとエーラの方に走っていた。

しかし、巨大な腕の片方は字原を阻むように伸びていた。

エーラの頭上に巨大な拳が急速に迫る。

瞬間。

「——！！？」

何かがエーラを横切ったかと思うとエーラの姿はなかった。

巨大な拳は何もない地面を打ち付けた。

「な————？」

ケルノウは戸惑っているようだった。

巨大な女の上半身の姿のまま辺りを見回すケルノウ。しかし、ケルノウは自分の姿を魔力の系に変えてしまったことで目がよく見えていない様だった。慌ててケルノウは姿をさっきまでの人間の姿に戻す。

「何してんねんっ！！ 字原ア！ アイツを殴らんかい！！！」
どこからか、男の声がした。

ケルノウが視力を取り戻し、最初に飛び込んだきたのは、拳を振り上げ向かってくる人間 字原彰の姿だった。

「……らああああああ！！！」

字原の振り上げた拳がケルノウの頬を刃物の様に抉る。

——バキイイイイイイ——

「が…あっ！！」

魔法 ケルノウは今日、この日まで感じる事はなかった痛覚を伴ったまま地面に倒れ込んだ。

第13話 『融ける身体』

「第13話」融ける身体

「く…クソ……ッ!!」

ケルノウは字原によって殴られた体を慌てて起こそうとする。字原に対してケルノウは攻撃の手段を持っていない。このまま、殴られ続けてはケルノウは死んでしまうだろうと、字原に殴られたことで薄れかけた意識の中、ケルノウは理解した。

ケルノウは身体を起こし――。

（エーラはどこだ…！全く…余計な…事…を――？）

ケルノウは身体を起こせなかった。

なぜならケルノウの体から脚が無くなっていたからだ。

（なに……？）

意識が途切れそうになる。しかし、ケルノウは残った上半身から何本も糸を出して、地面から残った体を人の目線の高さまでに持ち上げ、蜘蛛の様に起き上がって、目線をあげ、エーラを探し始める。しかし、視界には蜃気楼の様なぼやけた夜の公園が見えるだけで、人の姿などとても見えなかった。

（わ、私…が…崩れている……？）

ケルノウの姿は霞がかった様に薄れてゆく。まるで元からあったモノが風化して無くなるように、次第にケルノウは人の形からかけ離れてゆく。

（ば、か、な、あの、人、間。なにを…）

ケルノウの体は全て消え失せ、突如訪れた風化は、ケルノウの首にまで至っていた。

（これが…私の最、期であって、良い訳がない）

消えゆくケルノウは残った魔力を急速に収束し、一つの形をとった。弓矢。所々朽ちてゆく光の弓矢は真っ直ぐ、伸びてゆく。

視界を失っていたはずの魔力に対しての憎しみを持った邪心の弓矢はその邪心の深さからか偶然にもエーラの方に真っ直ぐ飛んで行く。弓矢は、エーラに向かう内に小さくなってゆくが、それはやがて弾丸となり、人体を殺すには十分すぎる威力を持ったモノになって加速し、飛んでいく。

それは、胸を容赦なく穿^{うが}つた後、音も無く、静かに消えた。

それが同時に、人間を最も愛した故に狂った二人目の魔法・ケルノウの最期だった。

「そ、そんな……」

字原は目の前で起こった事が信じられなかった。

ケルノウ自身が最期に放った光の矢はエーラに向かって瞬時に飛んでいた。

「ち……ちよつと、あなた……！」

しかし、エーラには矢は当たらなかった。光の矢はエーラを救い出した時の様に突然飛び出した、メイド服を着た小さな少女の胸を穿っていた。

「ね……音緒^{ねお}——ッ!!——」

字原は震えているエーラの傍でくず折れたメイド服の少女を抱きかかえる。

「……………ひっ！」

字原はスプーンでえぐった様にぽっかりと穴があいて、どくどくと血を流す音緒の凄惨な胸元を見て小さく悲鳴を上げる。それは、明らかに先程のケルノウの攻撃によるものではなかった。

音緒の口元から唐突に血の塊が吐き出される。

「だ、大丈夫か!? 音緒ッ!」

音緒の吐き出した血を受けて顔を真っ赤にしながらも、字原は音緒の体を懸命に揺するが、音緒は曇った目を空へと向けていた。遅れて、字原の後ろから男の声がする。

「無理や、字原。——もう死んだる」

字原は声のする方へと向く。そこには、音緒を悼むように口をつぐんでいる澤上信次さわかみしんじがいた。

「…音緒の胸の傷はお前がやったのか」

字原の声が途端に声色を変える。

音緒の胸元はミキサーの刃を回したかのようにグチャグチャになっていた。

これはケルノウにやられる前にあったものだ。

「それは……」

澤上が言い淀む。字原の顔が険しくなる。その顔には涙が溢れている。

「お前——」

「字、原さ、ン。」

不意に、字原の抱きかかえているメイド服の少女が壊れたスピーカーの様な音で喋った。

「音緒……?」

字原の涙が少しとまる。

音緒の表情は安らかな笑みを浮かべて、死人のように真っ白な顔だった。

「コレ…わた、シが、やったんです。心、配し、…で下さい」

音緒はニコリと明るく笑う。しかし、吐血したからか、真っ白な歯は真っ赤に染まっていた。

「おいっ! そんな体であんまり喋んな。お前のトコの奴らが来るまでジッとしとけ!」

澤上の声は動揺しているのか、上ずっている。

「嫌…。わた、シ。もうワカッています。このママ生きても、こ

の実験都市のドレイでしかないつ……て」

音緒は苦しそうに、懸命に言葉を紡ぐ。音緒は字原の方を見た。

「字、原サ、ん。わたし……は、不良……品で、シタ。貴方達……を、実験、都市のモルモットに、するコトガ。私たち、の仕ゴとでした」

「——やめろ」

字原は口からボトボトと血を流し続ける音緒に言う。

しかし、彼女はこれが最後と言わんばかりに、切々と続ける。

「でもね……わたし、シ。一、目惚。れシタんです。字原さんヲ見た時……に……。でも、」

「——止めて、くれ」

字原の中で激しい後悔がせめぎ合っている。字原は音緒の顔を見る事が出来なかった。

目を、ぎゅつと閉じて、音緒を抱きかかえている。音緒の真っ赤な口元に字原の涙が落ちる。

「へへ……フラれチャイ。ま……したね。でも、楽しかった。字原さんと、話した。時間……全部」

「音緒……！！ ごめん……ごめんな……！！」

「いい、ん……です。字原さん。わたし……が字原さんを殺……してでも……この、場シヨ、に連れてくるヨウ、二なる前、に自分ノ思いを伝えて……よかった」

音緒の言葉で字原は思い出した。この公園に来た時、何人もの音緒の様なメイドがこの街の人を囲んでいたのを。恐らく、あのメイド達は何者かの指示によってこの公園内へと連れ込むように動かされていたのだろう。機械仕掛けの人形メイドを無理やり動かして。

「わたし……実験都市ノ言いナ、リ。になっ……て字原さ、ンに死んでほしく……なかった。『実験対象死亡ニよる超能力発現実験』……。この実験を実施するタメに字原サ、ンを連れテキタク……なかった。わたし……がんばっタんですよ……？」

傷だらけで真っ赤になった胸を張って、字原に向かって両手を開く。

「――！！」
指示通り動こうとする自らの体を自らで抉り、字原が好きだという
固い意志を貫こうとした、鮮血に染まった震える音緒の両手があっ
た。

後ろから澤上が字原の震えていた肩に手を添えるように置いた。

「そいつは…自分で体内の命令系統を引きちぎりよってんや」
澤上は信じられない様に言った。

音緒の口元がカタカタと震える。音緒は微笑んだ。

「それに…脚は生きテ、たカラ。最期に…アの女の…人も、助け…
事…出来テ…よ…たです」

「音緒！？」

音緒の体が急速に冷たくなる。恐らく、胸を抉った事で露出して
いた装置をケルノウの決死の攻撃によって損傷したのだろうか。音緒
の血液は音緒の体内の機械に侵入し始めている。音緒の話す声が霞
の様に薄れ、段々小さくなる。

字原は音緒を地面に寝かせた。

しかし、音緒の苦しそうな様子は変わらない。音緒の吐き出す血の
量が少なくなつてゆく。吐き出す元気も無いのだろう。音緒の口元
からは吐き出す事が出来ない血がドボドボと溜まってゆく。音緒の
顔が陰しくなる。

「痛…い…。お腹ガ…痛イよ…。パパ…。ママ…。和人…かずと。みん
な、どこにい…るの…？ パパ…ドコ…？ ママ…ドコなの…？
痛いよ…。和人…お姉チ…ゃん寂しいよ…。」

「お姉ちゃん…？」

エーラがいぶかしむ。

「クソがあ！！ 死人を弄いじくりまわしやがって…！！」

普段動じない澤上が涙を流しながら怒鳴り散らした。

音緒たちメイドは元々、医療用に提供された死体がベースとなつて
おり、それに実験都市が機械を植え付けて利用しているのだ。

加えて、音緒は元々、数年前、キャンプへ行く途中、大雨で制御を

失った車が崖から落ち、交通事故で亡くなった親子四人の内の13歳の長女、早坂由利であった。

由利とその家族を乗せた崖から落ちたにもかかわらず、4人家族が全員、酷い有様で死んでいたのに対し、由利だけが父や母、弟が折り重なるようにして、由利を守るように死んでいたのだ。由利自身は当時、ショックによって意識を失っており、入院。昏睡状態が何十日も続き、懸命な治療が続くが、最期まで由利の昏睡がとかれる事はなく、やがて息をひきとった。

長期の治療を続けたことで、金銭的余裕が無くなった遺族は元々、その家族以外、身寄りのない身であつたことから、なくなく由利を医療用の解剖用遺体として『提供』した事で事なきを得た。

やがて、彼女の遺体は幾つもの機関にたらいまわしにされた後、この実験都市に来る事になった。

しかし、字原達は彼女の過去を知る由も無かったのだ。

「痛い……！！イタイ……！！痛い……！！！！暗いヨお……！！！！！」

「怖いよ……！！！！！！！！！！」

涙をあふれさせ、怯えるように体を震わせる。

何かの偶然なのか、残酷にも人工知能neoではなく、数年前に死んだはずの早坂由利としての意志が機械仕掛けの体を借りて、話している。

「音緒ッ！　大丈夫だッ！　なんにも怖くなんかないんだ！！」

字原は懸命に音緒と話そうと呼び掛ける。

しかし、音緒は呼び掛けるたび大きな声で繰り返し同じ事を叫ぶ。字原の気持ちが揺らぐ。

不安でいっぱいのは字原は、それでも自分を鼓舞するように音緒に大声で呼び掛ける。

しかし、声は震えて、涙でクシャクシャになった頼りない顔は心を偽つてもごまかしきれない。エーラと澤上は必死に呼びかける字原を遠巻きに見ていた。

「音緒……僕も……お前の事が……」

突如、音緒の声ピタリと止んだ。

「音緒……！！」

字原は目を瞑って動かない、渴ききった血で真っ黒になった音緒の体を抱きしめた。

それは、音緒が死んでから初めて『死人』として、人の様に扱われた瞬間だった。

不安げな面持ちで、エーラと澤上が気遣い気に、字原の方へと近づいて来て――

その瞬間、字原彰は意識を失い地面に倒れ込んだ。

第14話 『白い部屋、二人の対峙』

「第14話」 白い部屋、二人の対峙

「字原さまー？ ご機嫌いかがでしょーか？」

ぼんやりとした意識の中、若い女の声が聞こえてくる。

重たい瞼を開けると真っ白な部屋の中で一人の看護師の帽子、ずれ落ちていた大きな眼鏡、原色のTシャツに短いスカートといったラフな私服姿の上に白衣をはおった奇妙な容貌の看護婦らしき女性が立っている。歳は30半ばといったところだろうか。

「……………字原です」

何度間違えられただろう。僕は自分の名前を正しく言って、辺りを見渡す。

ここはある病院の一室であり、入院患者用の病室だろう。しかも大きなベットがこの広い部屋の真ん中にずどんと陣取っている飛びきり豪華な個室だった。

僕は途端に眩しさに目を細めた。

看護婦がカーテンを開けていて窓からさす陽光が僕の寝起きの網膜を容赦なく刺激した。

窓を開けながら看護婦が眠たそうな目を向けながら言う。

「あー、眩しかったですかねー？ でも我慢してくださいねー。」

字原さん運ばれてきてずーっと寝たきりだったから、寝起きにはお陽さまの光が一番すつきりしますんで」

「……………運ばれて？」

僕が言うのと看護婦は、はいー。と軽く返事をした。

「今朝——って言うてもド深夜ですけど、4時位に貴方が運ばれて来たんです。も、皆大わらわでねー。急患なんて聞いてないねえっーの見たいな感じでしてねー。何しろ体中に針の跡みたいなのがあって全身ボロボロだったの字原君は」

（だんだん、話し方が馴れ馴れしくなってきたなこの看護婦……。

目が覚めたばかりで、色んな事が僕の頭をめぐっている。

目覚めてこんなにはつきりしないのは初めてだ。まるで長い夢でも見た後のように、気持ちに整理がつかない。

「あの……」

僕は看護婦に話しかける。

「何ですか？」

看護婦がのそのそと僕の傍に近寄ってくる。胸には名札が付けてあって、それには下手糞な手書きの字で『葉坂』と書いてあった。

「ここって、どこですか？」

「ここは、じつ……ケミカルガーデンの第3居住区の第1病棟『ひまわり』ですけど？」

「……はい……？ケミカルガーデン？ あ……日本ですか？ここって」

とにかく、昨日いったい何があって、僕はどうして怪我をして病院にいるのか、それを突き止めねばいけない。

/

字原の病室の前で二人の男が対峙している。

お互いの間には友好的な感じは一切なく、どちらかというと敵同士が睨みあう剣呑な雰囲気だった。

一人は、天然パーマに青いワイシャツ、革のベスト。ファッション用の細いネクタイの伸びた先に、ダボダボの上着に似合わない迷彩柄のカーゴパンツといたいでたちの少年、澤上信次。さわかみしんじ

その少年の睨みつける数メートル先には、

真っ白に長い髪を白髪染めをして、その白い髪を雑草のようにボサボサと、ハリネズミのように伸ばした人目に付く髪形。更に目を引くのが彼のはおっているロングコートの様な大きな白衣その白衣は、あちこちが擦りきれ、裾の方には色々な色の薬品が染み付いて、不気味なコントラストを生み出している白衣の下まで真っ白な服を着ている白い男――

この実験都市全体の総元締め、与塚よつか一樹かずきが立っていた。

与塚の傍には、控えるように立っている、この場所には不似合いのセーラー服の少女と大きなヘッドホンを着けた少年がいた。年齢はどちらも高校生くらいだ。

与塚は後ろの二人を介した様子も無く、緩む口元を押さえられないといった様子で話しかける。

「お友達のお見舞いかな？ 感心だね。顔の腫れ、痛そうだね大丈夫かい？」

与塚の言葉こそ穏やかなものの、感情は全くこもっていない。

言うまでも無く、澤上の顔の腫れは先日、突如襲ってきた実験都市のメイドによってだった。

「何や。俺を肅正にわざわざ元締めが来たんか？ 与塚一樹」

澤上は構える。言葉尻には怒りがこもっていた。澤上がケルノウの所へ向かう前、澤上担当のメイドは何かに操られたかのように澤上を襲っていたのだ。

事実、澤上は実験都市によって殺されかけたのだ。

そんな、澤上の睨みに動じた様子も無く、与塚は大仰おおおごに驚いてみせた。

「止めよう。ここは病院だよ？ ここには何人の患者さんがいると思ってるんだい？」

「……………ッ！」

澤上を見た、与塚はCMの人のようにニコリと微笑んだ。

「それに肅正なんてとんでもない。君たちはこの街の救世主じゃな

いか」

「何の話や」

「実はね、私はあのケルノウに脅されていたんだよ。超能力開発についての情報穢渡とこの街の人たちと天秤にかけられてね」

「……………」

「私は、勿論人命を優先したさ。でも、超能力開発研究について知られるのはわたしの手足を切り落とすことと等価だ」

与塚は頬を更に緩ませる。

「君たちのおかげでこの街を脅かすあの悪者はやっつけられたってことだよ。この街に平和が戻ったのさ」

澤上は与塚の芝居じみた話し方を堪え、手を血が出んばかりに握りしめている。

眼の前の男は、死体を改造し、超能力開発の過程で何人もの人間を殺している大量殺人鬼だ。

「——能書き垂れんな屑^{くず}。胸糞悪い。お前は結局俺をどうするんや」

「…口のきき方を知らないのか。ま、いい。君はとりあえずこの街からは絶対に出す気はない。地下への監視を今まで以上に強化した。…殺しはしないが、色々と利用させてもらう」

「……………」

「うーん、私も今日、字原君にお見まいに来ただけど…、今日は日が悪そうだな。又出直すとするか」

与塚は澤上に背を向け、二人を従えて帰ってゆく。

澤上は与塚に向かって言い放つ。

「字原はお前の事を教えといたからな。ケルノウの二の舞にならんようにせーぜー、気をつける事や」

与塚は振り向き立ち止った。

「へえ、随分な自信だな。なあ、千霧^{ちぎり}。超能力ってそんなに怖いものか？」

与塚は傍にいたセーラー服の少女の方に振り向いた。

千霧と呼ばれた女の子はポケットから大きなペロペロキャンデーを取り出して、美味しそうに舐めながら応える。

「怖いっちゃ怖いけどさ、あー、……何もあんな奴が力持ったって弱えだけでしょ？ 舌先三寸ってーの？ マジ楽勝なんスけど」

「千霧さん。それ使い方、間違ってるッス」

少女の隣にいたヘッドホンの少年がいさめる。

「あ？ 劣等クソ久野^{ひの}があたしに意見してんじゃねーぞコラ」

少女は久野と呼んだ少年を睨みつける。

「お前達。喧嘩するなら家でやってくれ。父さんに良い研究データを取らせようとする気持ちは解らんでもないが——」

「ザケんな。ほっとけクソ親父。てめえも意見してんじゃねえよ」

澤上は眼の前の与塚を嘲り笑った。

「は、口のきき方はお互い様やな。同情するわ。ドラ娘に、クソ

親父」

「あ？ 何ほざいてやがんだ、このゴミは…？」

千霧は澤上の方を向く。

「おい、親父。このゴミ^{かた}殺すけど、いいよな？」

視線を、澤上に向けたまま千霧は舐めていたキャンデーをバリバリと噛み砕いた。

ヘッドホンの少年、久野が芝居じみて慌てたように言う。

「…千霧さん。さっき父さんが言ってたじゃないッスか。お前は生かしておくからって」

「親父。どうなんだよ」

与塚は腕を組んで微笑んだ。

「久野はよく話を聞いてて偉いな。ま、そういう好戦的な姿勢も好きだけどな、千霧。じゃ、『能力』だけでやってみたらどうだ」

千霧は満足気に笑った。虫歯のためか歯が何本は抜け落ちて、歯並びはガタガタの少女とは思えない醜悪な歯が見えた。それはまるで絵本の魔女の様に汚らしい様だった。

「——！！」

澤上が千霧の顔を捉えた。

「んじゃ、行くか」

少女の言葉の数秒の後、澤上の視界が途端に歪んだ。

ありとあらゆるものが歪む。床、天井、壁、そして眼の前の千霧達の姿でさえもが歪んでゆく。澤上は瓶の中に入れられて揺らさされている様に、平衡感覚を失ってゆく。

景色が歪んで、澤上の見ている景色は数秒前とは似ても似つかぬ空間だった。

澤上は立っていらなくなり、がくんと膝を地面に落して、頭を抱える。

澤上はその揺れ動く中で、混濁する意識のまま、高らかな千霧の笑い声が聞こえてくるのを微かに聞いた。

「ざまーみる。この街の飼い犬の分際であたしにモノ言おうなんて生意気なんだよっ!!」

「っ……!!」

千霧の言葉が終わるか終わらない内に、澤上の横腹に千霧の蹴りが入られる。

予期しない不意打ちだったので、澤上は痛みに悶えた。

千霧の後ろから与塚の声が聞こえる。

「ほら、千霧も気が済んだろ。帰るぞ」

千霧の声が次第に遠のく。恐らく、与塚に引き摺られているのだろう。

それにつれて、澤上の景色の歪みも次第に収まり、元の景色に戻りつつあった。

目をあげ、さっきまで与塚の居た方を見る。

千霧達はいなく、伸びた病院の廊下の先には幽霊の様な与塚の姿があった。

「一つ言っておくが」

与塚は芝居じみて言う。まるでこの事を何よりも伝えたいという口ぶりだ。

「今、隣に入院している字原彰^{あざはらあきひ}。彼がケルノウとの闘いの中で目覚めた超能力。えらく厄介なもので、どうやら一種の『未来予知』らしい。私達からしても厄介だし、まあ、彼がこの街の暗部を知ったって言うのも同じくらい厄介だったんだが、どうやら彼の主治医によると一部の記憶を^{いっさいがっさい}こっそり失ってるみたい。この実験都市に來てからの記憶を一切合財ね」

「何…？」

「ここ数年、超能力について解った事の中で能力を使った人は例外なくペナルティを受けるらしい。彼も例外じゃないってことなんだ。何れ超能力に目覚めるかもしれない君も気をつけるといい」

与塚は澤上に背を向け、去ってゆく。——ま、会ってみるといいさ、——そう言い残して。

「……」

澤上は与塚の去った方をぼうつと見つめていた。

やがて、澤上は、字原の病室へと向かう。

澤上の胸中には気にかかる事が多すぎた。

この街に突如現れた公園の一角を凍らせた魔法使いという存在。魔力を使役する人ならざる存在、魔法。

そして、その魔法ケルノウはいかにして実験都市の超能力研究を知ったのか。

人工知能neoの突如、暴走。

澤上自身を一瞬にして苦しめた超能力者の存在。

そして、字原はどうして記憶を失い、超能力に目覚めたのか。

メイドの音緒が死んだあの時、どうしてエーラとか言う魔法使いは『あんな事』を…

今、澤上信次は字原彰という超能力者と付き合えばいいか考えるのに余念がなかった。

澤上は字原のいる部屋のドアを開ける。

部屋の中にはベットから腰を起して、突如病室に入ってきた澤上の方を不思議そうに見る字原がいた。

澤上は恐らく、与塚の言っていた事の通り、字原は澤上自身とは実験都市に来るバスで知り合った仲で澤上の事は覚えていないだろうと。

（時間はいくらでもある…。話したい事が沢山、俺にはあるんや字原……！！）

この閉鎖された実験都市において大きな争いが幕をあげようとしていた。

第15話 【字原彰】

「第16話」 【字原彰】

「あー、与塚さん丁度良かったです」

一人の女が、病院から出ようとした与塚に声をかける。
声をかけられた与塚が女の方へと振り向く。

「葉坂さんですか。なんですか？」

字原の入院している病院の看護婦、葉坂は不機嫌そうに与塚を見つめる。

「あのー近頃、実験都市の外で何か色々デマみたいなのが報道されてるらしいんですよ。やったの与塚さんですか？」

「ああ、暫くすれば落ち着きます。字原君に、この街の暗部を教えるようにする輩がいるみたいだね。デマを幾つも流してこちらが真摯に否定し、それらを根拠のないモノと崩していけば、字原君もその澤上の言葉には耳を貸さないでしょう。気をつけてないとこちらが喰われる」

葉坂ははあ、と溜息をついた。

「もう。やっぱりですか。お陰で、この街にお薬があんまり入らないんですよー。早く『融通』の利くようにして下さいねー……あ、そうそう」

葉坂は思い出したように人差し指を上げる。

「澤上さんって言えばやっぱり、来てくれましたねー。わたしの作った人工知能たまにはいい仕事するでしょー」

葉坂は子供の様にかからりと笑う。

「そうですね。澤上もある意味では、字原君と同じような役割でこれからがんばってもらわなくてはいけませんから。……この街からは誰も出ようがないのに、彼は街から逃げ出したというこの街の人工知能に話させたこの街の暗部を聞いてここに呼び込んだのです

からね。人の正義心というのは扱いやすいモノです」

「……………」

葉坂はその言葉に恐らく、与塚の本性を見抜いた。

人を利用することで利益をかすめ取る様な、非人道的な人間、与塚一樹という存在を。

「魔法という存在も、我々は考慮せねばいけませんね。ケルノウ……彼はどこでわたしの研究を知って、そして……………誰が情報を流したのか」

振り返って、与塚は病院の上、字原のいる病室へと目を注いだ。

「字原彰……。彼は我々人類の生の概念を変える人間かもしれない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0220u/>

【実験 / 都市】

2011年6月12日13時38分発行